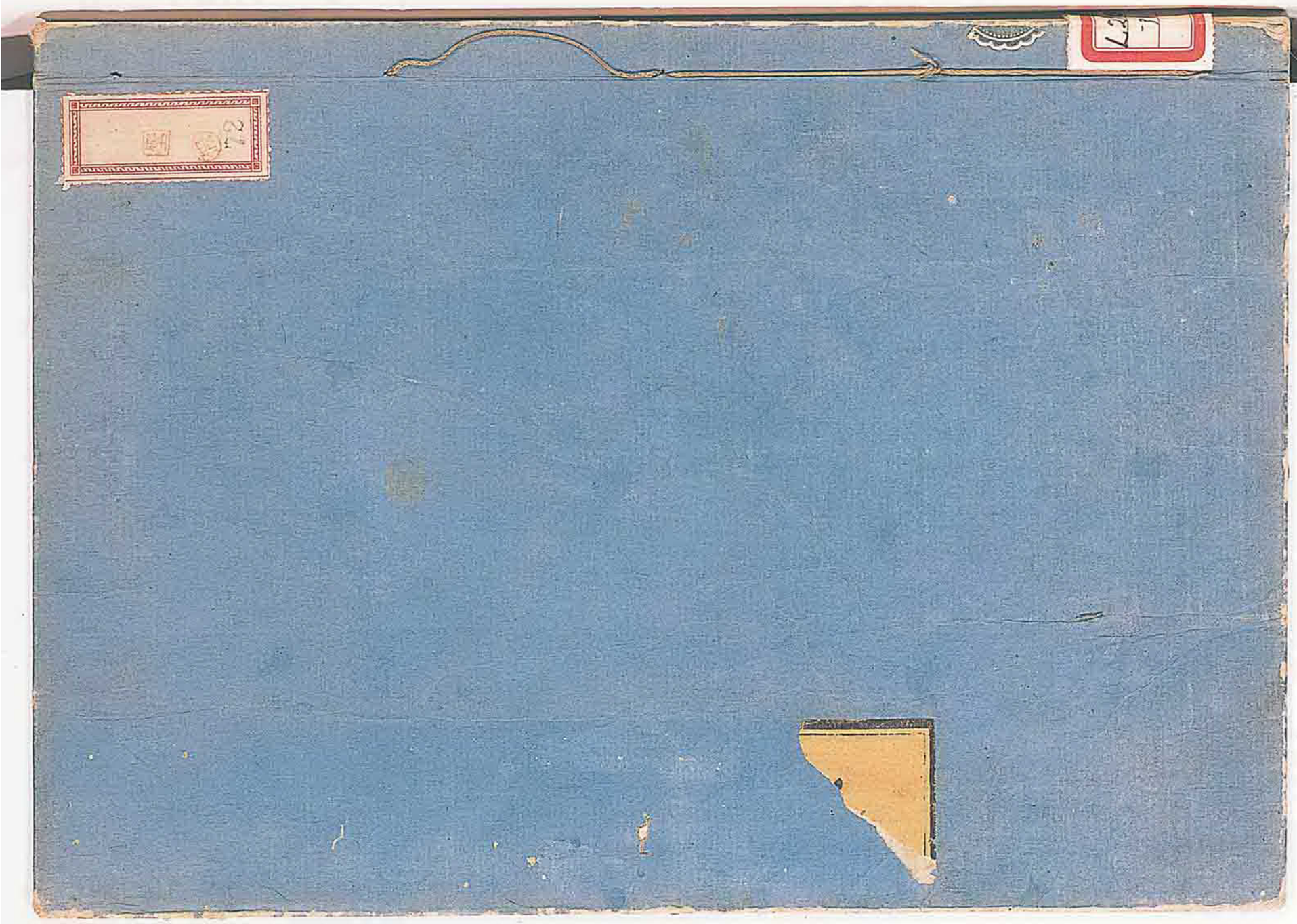


木曾路名所圖會卷之二

目録

寝物語里
妙應寺
宗盤所の墓
不破關
○關ヶ原
関原與市茅屋
班女旧蹟
美濃中山
南宮金山彦神社
勅使殿
以上瑞垣の内
龍飛御宮
落合祠
和射見野
青墓祠
黄鳥瀧
戸佐々宮
美濃中道
天武天皇行宮
野上里
不破頓宮
本社
隼人祠
蓮摩堂
内小あり
三重塔
朔千害祠
車返坂
親鸞聖人旧跡
大谷吉隆塚
月見祠
竹中重治城址
桃賦
○垂井
垂井頓宮
十禪師社
南大神
本地堂
釋迦堂
稲荷祠
○今須
黒血川
開藤川
不破光治砦
首塚
伊富貴神社
垂井清水
民安廃寺
高山右神
王子祠
元三大師堂
薬師堂
山王祠

氏神祠　神祠　荒神祠　金數金東祠　中殿高山祠　立祠　數軒人祠
辨財天祠　神明宮　高山祠　十一面觀音
子安祠　神田代祠　十八末社　衣裳堂
千手觀音　天滿宮　松下祠　十王堂
神明宮祠　大領神社　七之宮　祠之祠
地藏堂　狛犬　岡府宮　
約洗　五層石塔　石為居　
空也堤　南宮　牟中　
牟地堂　牟中行支　養老祠　牟中行　
系統之図　春王丸墓　
安王丸墓　
美濃御山　養老滝　青野ヶ原　
相川　日目上人茶毘所　
國分寺　小條行塚　
御勝山　日目上人茶毘所　
金生山　
呂久川　
結祠　
名産甜瓜

○美江寺　
谷汲観音

○赤坂　
杭瀬川　
後光嚴院帝小鴻頓宮　
美江廃寺　
糸貫川　
寢覺里　
金蓮寺　
青墓里　
甲塚　
喪山　
幣掛松（名石　鉄坂物見松）
朝長墓　
子安祠　
笠縫里　
そはのすゝ記　
自然居士墓　
席田

船本山　
岐阜　
長柄川　
天神社　
比奈守神社　
御井神社　
村國神社　
岐蘇川　
名産美濃紙

○伏見　
可兒藥師　
源宮　
永保寺

○河渡　
稲葉山城　
鵜飼圖　
往来松　
新加納　
各務野

○鵜沼　
太田

○太田川　
在原行平塚　
本闇魔堂　
和泉式部墓　
平巖

○細久手

河渡川　
稲葉山　
岩田小野

○加納　
瑞龍寺　
飛鳥田神社　
針綱神社　
惟子山　
名製関鍛冶　
懸主神社　
鬼首塚

○御嶽　
庚申堂　
一呑清水　
月吉日吉里

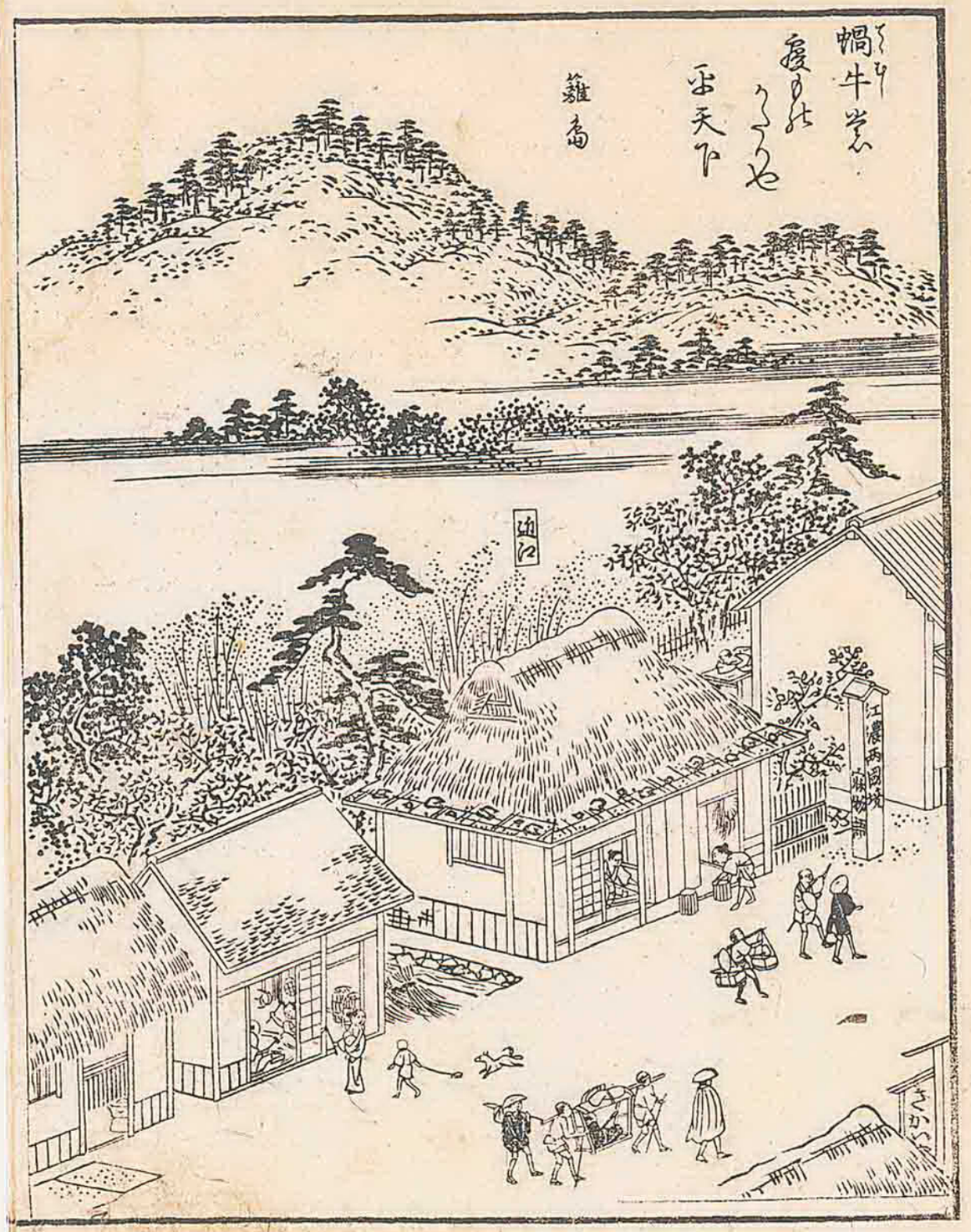
乙津寺　
因幡神社

○茜部神社　
加佐美神社　
例祭絵の圖　
岩窟觀音　
名産蜂蜜柳　
金山古城

○阿弥陀堂　
護摩堂　
鬼岩窟

琵琶嶺
竈山
西行硯池
根津甚平墓
中川神社
母衣岩
伊勢参宮別道
○大井
坂本
惠宗神社
烏帽子岩
七本松
苑かし山
八幡宮
與坂番所
○大淵
西行墳
大井橋
○中津川
落合霊社

木曽路名所図會巻之二目録終


蝸牛岩
天下
雞鳴
江戸両国橋
両国屋

寝物語の里
東坂
吳服
両国屋
足西坂本山頂

本曾路名所圖會卷之二

寢物語里　こゝより近江国に属す

なかつくべくとゝ　武里小義経の愛妾静江田源義経を慕ひあれども取らじと

寢物語里

菊川記

なけくべくとゝ　近江と美濃の山城

左右ふたつゆくさゝ

右左見くゝりは近江美濃ふたつの山をたけてくべくとる

菊川記に一條禪閤後成恩寺兼良公法名光恵と号し

文安二年古改大臣同三年閑白文明五年出家日十二年薨年八十

和射見野　長久寺村の南北田園の地なり

今は地名伝聞澤邑と云へり

天武天皇大友皇子に襲撃ひ武鳥市王子北陣営小行幸

しのゝ事　日本紀日見てゝ

方業

真木立不破山越而狗飯和射見乃

原乃行宮尓安母理座而天下

同

吾妹子之笠借手乃和射見野尓吾

者入跡妹尓告乞

夫木　真菱よりたをのうてはつさこの武うら来くはやをはつる　公實

同

あけくれの志ぶたうこと身のつくしのと狩ふ夏草はたも　兼良

同小云天武天皇ハ天智帝の皇弟なり此の長子大友皇子左

うしくくこゝ其後天智の帝崩しぬ後世に吉野に出家あゝんとの由支

せくや其後天智の帝崩ぬ後世に吉野に出家あゝんとの由支

軍しぬ受位ハ日本紀ハ辭なり大友皇子ハ

勢田の橋ハ大友皇子ハ天智帝

の嫡子なり博學多才弱冠

にして皇太子ハ魁岸偉風範ハ

古代愛し筆を下せば

海詩賦の妙を得ぬ事

考見て清見原天皇の聖

車返坂　長久寺の東二町許小

六町あり文明の頃後普圓院

しけ不破の関の月清

あれくる作りて見ぐるしと

結るとくを坂ゆく風し

坂なれとて敷さめひ一首の

菅久くく月こそ秋の板庇

弱濃せられ清車返しぬふと里清

のほとり小清水勢化のよう武書の

夫木巻二ノ二

美濃 今須

関ヶ原中にて一里ばかり居益宿書しるし此宿東の端ふ居益塔下中ほどに坂あり俗に和字と又訓ずるなり西の中ほどに

寺なり嶺あり多く神社あまたはなを向て通る渭く

義川記 一支関ふあれは茅支をたがへさき所とする屋

此山ふ神せいなをれを白せむ紀茅のなさいろいろ

兼良公

妙應寺 今須の宿中小例の東にあり青坂山と号に曹洞宗西英禅師の二世莪山和尚開基なり寺領二十石開山は道元禅師の二世莪山和尚

尚本願ふむ〳〵今須の城主長江右衛門重茅の母菩提の為ふ建立ありし今伏見宮御願所とある

青坂祠 宿の東小山の例ふあり妙應寺の鎮守なり祭神孫命五郎累改ふ霊社を遷ふ

土波ふ屬し此祠を重茅ふ茅改七世の孫なりわ

親鸞聖人舊跡 今須の東花米村聖蓮寺ふ

東軍願寺 此の寺ふあり

桂木 聖人をばくの樹の事〳〵旧跡ふ茅ふ旧跡ふてもおく近世

黒血川 今須の東山中村の小の方の流をり

留士紀行

立よりつくれい名の茅を黒血川ふ記茅ふ流の茅ふ郡

兼孝

本巻二ノ三

義川記

黒血の橋ふ前を

太平記

白波ふ岩社岩根ふ流れふ黒血の橋の名を

兼良公

ちくぶ村刑を移さんと向と大将軍ふ高氏後守師泰月摂磨守師冬細川刑部を捕頼春治ふ本判皮成頼治ふ本法波判皮入道乃巻子良近江守秀綱以外諸國の大名五十三人勢合其勢を方好猛二月四日勢を方ふ

日六日の早良ふ近江と美濃の境なる黒地川ふ長江ふ奥勢も楯井赤坂ふ名ふ陣ふ国ふれ

ふ黒地川をあてく其国小陣城ぞ取ふ

義川記

義川ふ関の義川を屋ぞ後ふ

勇士猛将の陣城取ふ敵を待川ふ後ふ山ふ義ふ水城さふ事ふて

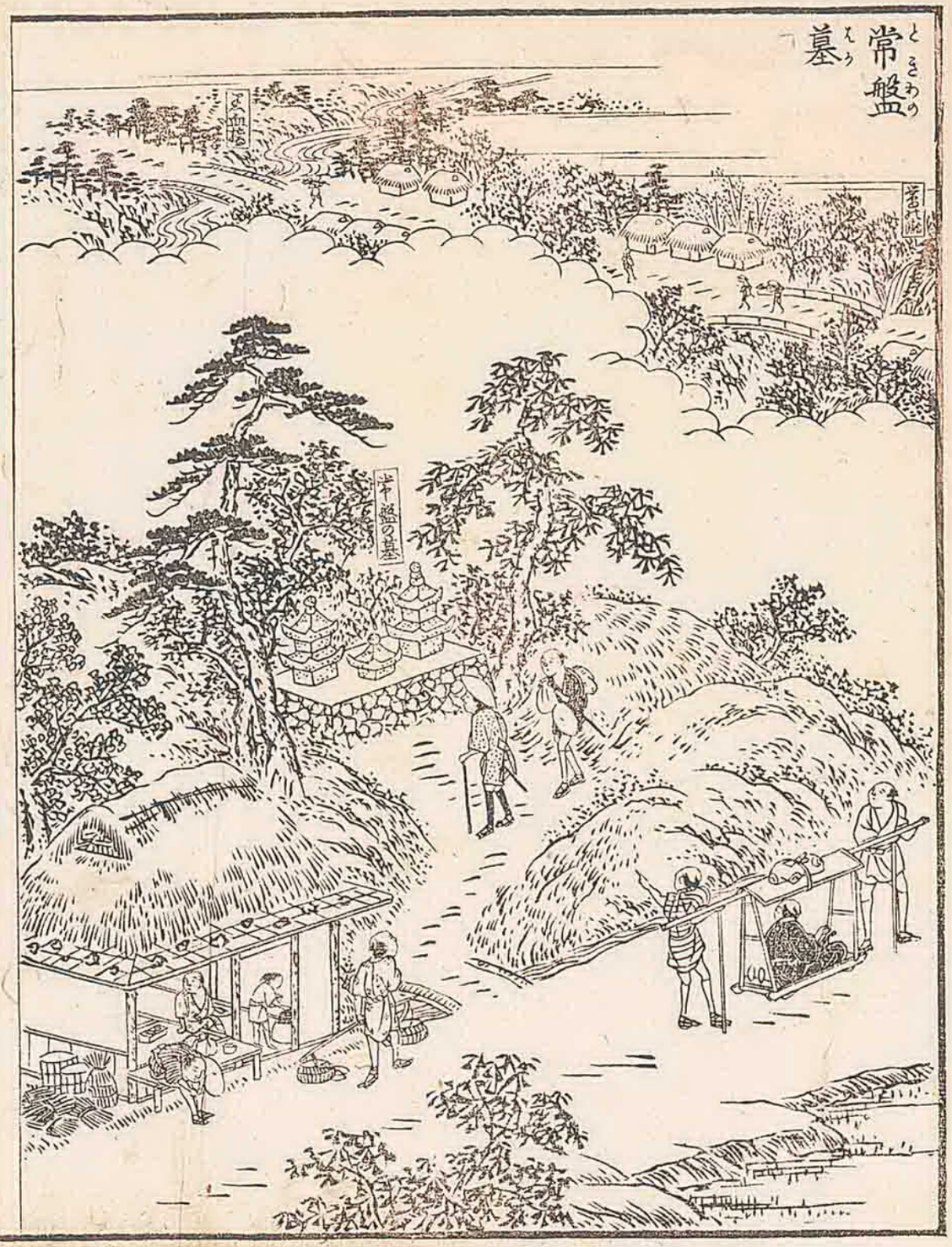
こをあふ今大河を後ふあて陣を取ふ事ふ赤一ツの兵法ふ

むふ漢の高祖と楚の項羽ふ天下城事ふ事八ヶ年ふ間郷ふ支止さわ

けるふあふ高祖軍ふまけふ逃る事三十里討殺されふ会を投ふ

三ふ條ふも足ざりふを項羽に十万騎城ふ引くこれを追ひふ其日

既ふ暮ふ夜明ふ漢の陣へ押よせふ高祖を討ふ亡さん支ふ



にありと雖も勇烈なる小高祖の臣小韓信とゝひ〜兵法大将小ふ〜て陣を取り世々の小韓信ワざゆゑ宵小大河をあて〜橋法焼為〜糸を打破く者を拵〜うけること能わ迚も免るまじ所を知く士卒一引も引ぬ者なくみな討死せよゆゑ小さん為の謀なり夜明けまゞ項羽の臣十万騎あ〜あ〜よゆゑ敵小勢なりゆゑ侮く武を即対小変せんとん其勢繁盛〜て左右を顧ず〜々と々々武韓信ガ兵二千餘騎一足も引ぎ死をあ〜ふく覚ひ々々細小項羽多ちふうち負く討ること廿万人迯る武逃走ス十餘里ゟ泥とゝひ泥を通くこゝゟでも敵よりもかゝ小支障ゞゆゑ橋法引く者を長〜うける漢の兵勝小乗く今青あゞて項羽の陣へ寄んとゝけ新よ韓信兵士をあ〜小武く中々るい家男〜ふ〜負う宵後苦みか持とこ為の云糧を奪く其嚢小砂をへく拵べ〜と者を下知〜けゞ兵こな砂ぬ車うゑと云ひぶゞう大将の命に随く士卒みゝ持所の粮糸と持く其嚢小砂をへく項羽ガ陣へ者押よせる者よへく項羽ガ陣の粮を月々小ゞ分留泥武さゝひ

沢城陽ろく馬の足も立たぬ深田なりと所々に陣取うわるに附韓信
持せる而の水嚢城沢ふ投入れくこれを堤ふ為して其上城にうるふ源
泥さるに平地のめ〜項羽の兵二十万騎終日の軍ふ人馬共疲れ
敵寄る所に道ふ〜ゆ沈ふして常俗こつく寝うる所より高祖の兵七万
騎周をこれを法ふ川こく押よせてれば一戦ふも及び項羽の兵十万騎
みか河ふおぼまこく対ふ不ろわ色と名付く韓信ぞ襄城背水の陣と
ものあり今時泰時を頼春ぞ敵城大勢なりを聞くはづと為沢を
背ふ船して関の藤川ふ陣を取るも専士卒の気弱きにみして薄び
韓信ぞ新城ふ入るものなるべし去程ふ國司源家卿の勢十万騎金井赤
坂青野ぞ原より充満して東西六里南北三里ふ陣を張所

常盤御前墓 今須の東山中村の小字民家の傍ふあり石塔婆三基あり其従者の塚なるべし一説ふ常盤駿河守ぞ墓ともて

義朝の古き為ふ仏の風

黄鳥瀧 川上ふ巨岩塚の東の方ふかくれそれより垂れるれ落の瀧ふ為る

家集 梅ゥ香の下り水の流ゆを堰きとられき乱れ落ゆん梅

家隆

大谷刑部ふ浦 谷隆塚 山中村左の方の山下ふあり 墓長孔後藤堂家これを建る

関藤川 松尾村西ふあり水源伊吹山の麓より流れく和国街道義川の右乃東別素名ふ入る俗ふ破の関れ下を流れ多良川ゆ義合く桑名

義ふ川より土搗うり

古今 美濃國関の義川ゆ人をして若ふ法ふ人を為川代ゆふ

大鈴所 光明峯寺入道関白左大臣

風雅 神代より道ある國ふ法ふ乃居ちゆうもたる所の関の義川

後古今 夢代ふ法ふ人くも見む月を見る沢新をゆ見る関乃義川

定家 後拾遺 ゆ代ゆ法ふ人くも見む月を見る沢新をゆ見る関乃義川

後京極摂政 ゆ代ゆ法ふ人くも見む月を見る沢新をゆ見る関乃義川

新後撰 ゆ代ゆ法ふ人くも見む月を見る沢新をゆ見る関乃義川

家衡 ゆ代ゆ法ふ人くも見む月を見る沢新をゆ見る関乃義川

大政大臣 ゆ代ゆ法ふ人くも見む月を見る沢新をゆ見る関乃義川

後千載 ゆ代ゆ法ふ人くも見む月を見る沢新をゆ見る関乃義川

為世 ゆ代ゆ法ふ人くも見む月を見る沢新をゆ見る関乃義川

右大臣 ゆ代ゆ法ふ人くも見む月を見る沢新をゆ見る関乃義川

同	頼むそよせんの蘇の末までも世のふる雨と君ぞ降りける	一条内大臣
同	流れゐぬ行むかひのあれ世の中に老ひてもこれ罪れぬ河	後人麿呂
新千載	教すゝめ世の後川こそ教ゆるのわれ千あ世世よ法之の	法皇亜相
奇枕	ふちの河瀬も老ひ花の枝さして長の紅紙ぬしはふう邪	姫古
名寄	雪かくす水の上の風ふ駒うちふさむ開の沼ち川	秀能
同	さてもまた老の世名とやうちわはしの玉渕瀬の実の後川	二条関白良基
建保百首	吹きて〜風を侍ひの山ん猪をさ桜ひく出る世れのうち河	康光
同	春の嵐ちてる侍吹の山さんら花をとりらすか実の蘇河	能頼
雪玉	法之人こそ行を雪井の代くと行く底をまるせきのうち河	内大臣 実隆
新後拾遺	数を後れ乃の志るべも有る表法義法世こ水せきれうち川	中院通村
十六夜日記	十八日ふの〜國小関の後川ひろる行ふまれ川おりひ法〜多	
後川記	我ちと岩君よ法人んとあるてひてしはやを罪の後川	阿佛
	蘇川乃橋ん桁の杭を見てく	

弱ちもや幾多浪をひてよ底川代契る世れの後川　同

物の人君おかゝ流の絶代て

不破関古蹟　松尾村の内西の方後川東の岸よりこ亀の家跡今大木戸といふ　不破の関の始を天武天皇二年より此関を建られ

千載	あゝ見てる不破の関屋小荒屋して後を遠ざり荒れ	大中臣親守
新古今	人を忘ふれの関屋の板庇あまるゝのちたゝ秋のり世	摂政太政大臣
新後撰	秋風小不破の関やれあれまくもをゝうゝ月を漏る	信実
新拾	古の立ふかも人ん志ん為を発よ不破の世れ当	源頼康
後拾遺	いあてて立ゆ古の不破の世き踏り秋わる秋	後京極太
沖集	おとゝむ抽れ実なてをく見るひ毎小荒場ゝ	後人麿呂
文本	不破の山世のたゝれ関の屋ををるこんをゝ踏る花ふ	沖製
同	雪ゝ秋侍吹の嵐とめふりみてこゝを蘇法るふく秋実山	為家
同	見ふ行よ人ゝ多りるといりてゝ秋ふはゆせよ数の関守	仲正
	山ひ乃ふ秋れ罪ちるとゆもゝろと名のる対るゝ	光俊

月

不破乃や万紅葉ちりうつ梢より嵐成こそ関守りの松　隆信

後拾遺百首　東路の不破の関屋乃玲瓏成むさやふ物を空ひるるな　仲実

文本　物る里の山の中山月かくれく実屋さひしき秋の色をうく　光俊

不破の関屋荒板びさしこ〻ろ〻ぞ〻ぞ〻ろ〻わ

新撰万葉集　秋乃月さ物こそ見屋ちこの程乃村雨も月さんつ〻ぞ〻ぞ〻ろ〻わ　阿佛

光明紀行　楢原とら山こそ後とこそ〻く英濃国第山ふ〻をうこそ〻ぬ岩川きこ〻のうこ〻ふ

こ〻ぞ〻を嵐松さん木ぞ〻ぞ〻すこ〻ぞ〻ぞ〻ぞ

不破の關屋を見侍るに行末もいとゞ荒れくもり朽ぬべくなん物哀れ之中御門
摂政乃行末ふり渡るに秋の風や孫のひゝ事なとれり充あつせ
られて

あまたの所不破乃関屋の板庇をとゝ山をふるさとあるる哉　仝

戸佐々宮　美濃川の東岸上の南社還の傍ふあり
按ずるふ延喜式大領神社多くん欽
祭神　天武帝の霊を奠奉ふ　美濃神名記ふ
美濃川記　関比男明神
むつ清見原天皇東宮のくらゐを辞して吉野山ふ入給ひしかども
程ゆくまゝしく大友の王子に襲まとられ云々ふ山城のくに
出く伊賀伊勢北国を経て美濃の郡上より行宮をたゝれ事を
日本紀なとふ志るしあらまゝ事遠ふあとるれど宮の裔孫なと
たゝふ志る人は有ぐとかるべし今を昔のわゝ乃名ゆゝあと
かゝふ道ふなわゝるを見く
行幸されし所上の事成うる文の詞もいとゝ尤ゝ我身

柔良公

本巻二ノ八

月見祠　松尾村の南田圃の中小枝の森あり春日神を奉る美濃の中山の裏
ふ八月十又日月の清明なる夜を月見祠ふ月見
出まゝ境墓の如く板へふ境基山ふ月見
ありく詩哥成詠吟ふる事多し
不破河内守光治居　松尾村の南北山光治ふ奉孫北国の
に住く濃州井六角智の押への巻ふ山所ふ岩成摂ふ慶長沛陣
ふ金吾中納言秀秋も赤ふに備を擬ふ

美濃関ヶ原

盃井　中ゝで一里宿中小八幡宮の祠あり山石の生土神ふ
山祠の側ふ若狭越前へ通る北国街道なり

遠迫抄

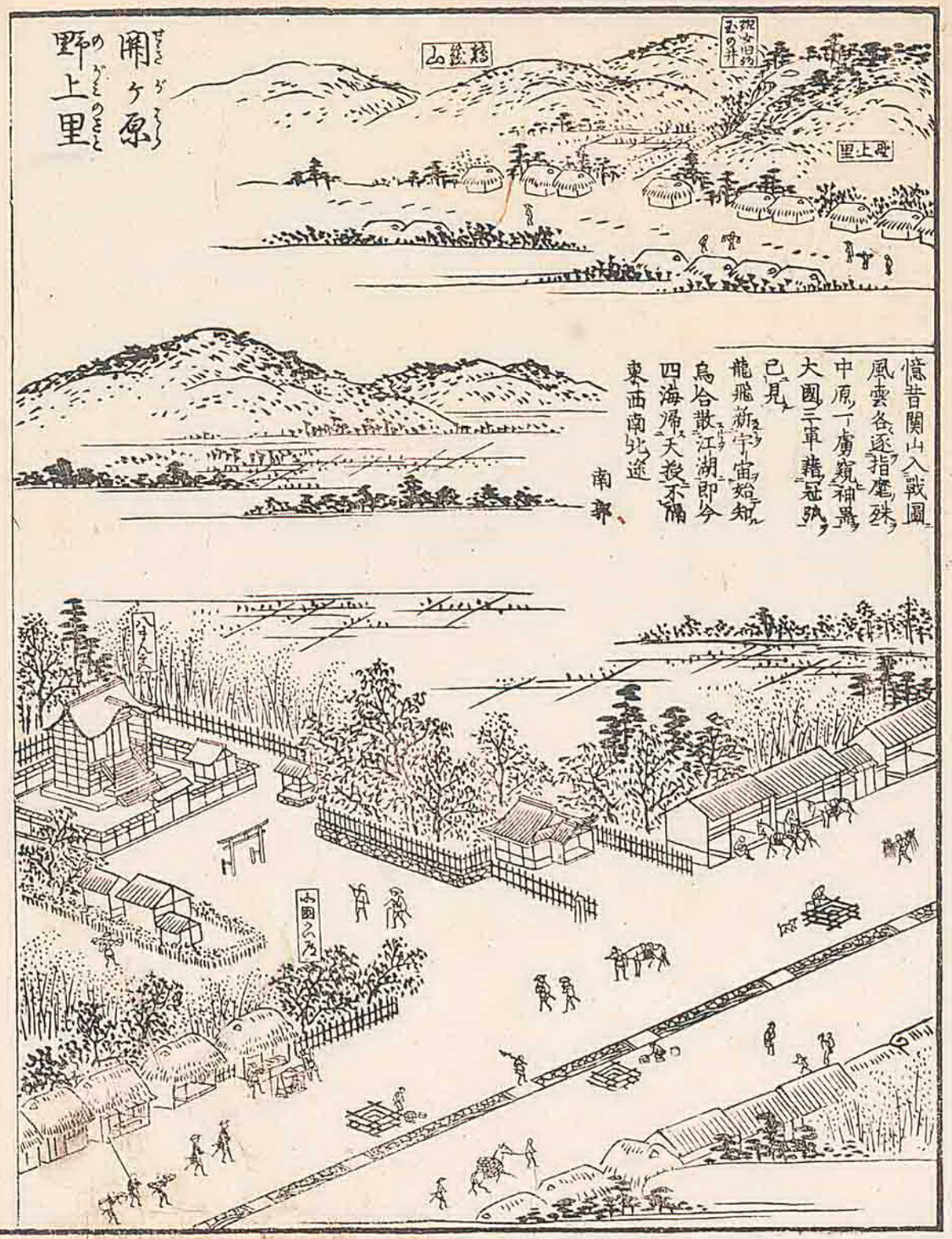
當乃帰つる夢ふ志ゝ行くゆ行も中れ如関ふ志ゝふ
美濃中道　関ヶ原駅中ふ牧田へ行道なり石標を建ふこれを牧田街道
ふ冥ヶ原ふ冥ヶ原ふ牧田中で一里沢田村高田村を経て鳥江村
より伊勢桑名尾張の宮へも紀路あり者人の為ふ志ゝ戸へ
ふ志ゝ山道を通るふ

梓弓

あまたの英流の中乃ゝ我身ふ秋乃ゝる世ふ哉　好忠

竹中半兵衛尉重治城跡　関ヶ原ふ小の方
信長公の臣作中重治の居城なり天正七年の頃
軍側の高傑ふ

首塚　冥ヶ原宿の西社還の左ふあり又若宮八幡宮の傍
慶長戦死の塚なり



毛沖る火出見生仕業葉れ初るかな　雞爲

開原與市屋敷趾　當駅の口士形わ洛の栗田口あく半丸ふ川舎て
水と跡上し　人なり其子樋口犬房丸　とゝよ比子絲

あつしゲ迎世
沈絶ふれよゝ

天武天皇行宮　野上村の西社還右の方　山間の平地をりゝ又慶長五
年九月十五日沛軍陣なり
桃賊　其地の字なり天武帝元年
六月こゝふ切ゆさ　ゝ九ゝ

日本紀云
天皇於茲行宮興野上而居焉此夜雷電
雨甚則天皇祈之曰天神地祇扶朕者雷
雨息矣言訖即雷雨止之戊子天皇往於
和塹撿校軍事而還己丑天皇往和塹命
高市皇子鞆令軍衆天皇亦還于野上而
居之

伊富岐神社　延喜式不破郡三座の内
祭神　鸕鷀草葺不合尊　上の小伊吹村ふ　鳥居額伊富貴大明神
　　上伊吹両村の生ゝる神ゝ

本名二ノ九

神道百首　　卜部兼邦

ゆさあむ山をいくさ山の神なりけり　ちはやぶるかもとこそ

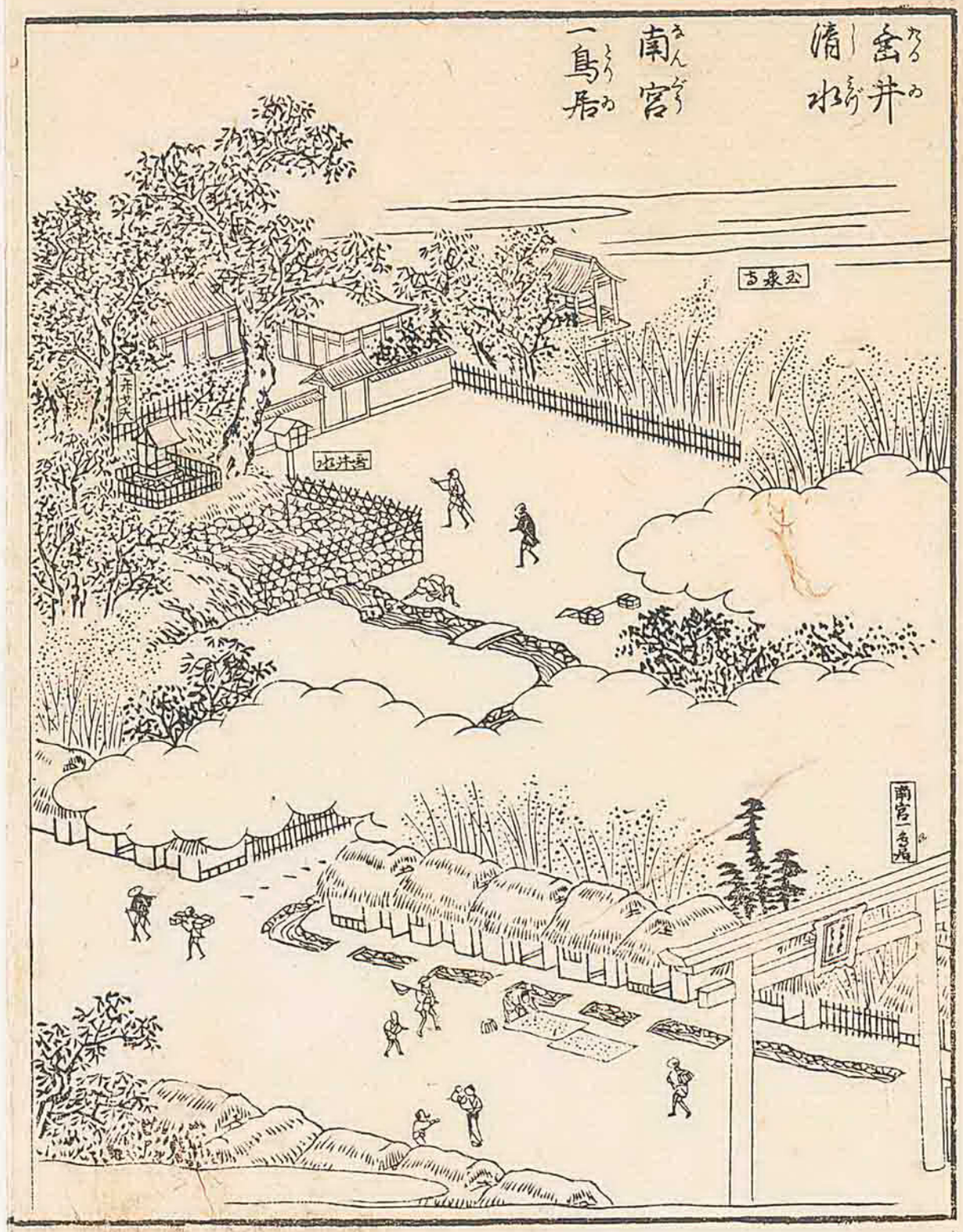
班女舊蹟　野上の南鷄鼠山の禁

性還　ようかしゐの方へ入

野上の長者あり　ようかしゐの方へ駅あり　野上の長者あり　ようかしゐ

観音堂　野上　遊女あり　ようかしゐ　ようかしゐ

ようかしゐ　ようかしゐ　ようかしゐ



金井清水
南宮一鳥居

あさぢふ下ながれをくみて玉泉の流れよ神泉の流れん　兼良公

山清水を特よ清冷み〜く味ひ甘く寒暑小消滅かし〜ゆき〜ゆく人
渴気をのぐに足まり減くを汲泉殘よ仙るとて梅聖愈が詩乃

さ〜ぬ水迫〜

美濃中山　南宮山　美濃の中山　美濃の中山　美濃の中山　美濃の中山　美濃の中山

後古
後後拾
後拾遺
文本
同
同
同
後茎房集

逢坂の関　定家
逢坂の関の嵐川　新古今　為家
美人ちら
中務親王
為相
中務親王
同
二条宰相

同

同　ふかき夏の夜の月中山城国にて後の関白義川

ふるさとの月に我身あるをだに石彼の山ちかく親しかりしを

一宗清抄　城廻て家を宮りる如くものやまはらふるみかの月　北阿

不破頓宮　垂井の宿今御所跡と

らく所其古蹟なり　後柏原院

聖武天皇伊勢行幸の時こゝに行宮を立給ふ　天平十二年續日本紀に見えたり

垂井頓宮　垂井の宿の内の裏

御幸道のほとにあり

後光厳院文和三年南軍に襲まれ給ひて小行宮を建給ふ所也

民安慶寺　垂井の小屋中村ふかく今は慶寺と云　兵石地蔵一基殘る銘云

至徳三年八月日願主理栄とあり

文和三年六月後光厳院の帝ましまし給ふ所也

義川記　殿舎をこゝにうつし給ふの道ほとおりむさ垂井ふいこう民安寺と云律院

ふるまひの儀や文和の頃後光厳天子南軍に襲まれ給て小屋

引奉りこゝに此寺ふるをつくりたまひ今は其跡も石礎など

あり其こゝに自ら粧させ給ふ松の老木とあり

世よりおのゝ長の清新小たゝ民安ゝ也とうえ〜ゝあり松　兼良公

太平記　義詮朝臣を兼く作く木秀綱を給ふ国小備まべ東坂本に幸こゝ為安ゝ

こゝふく国くの勢とも馳さんと議せられるゝ右野殿ゝ大義院の法印況

大将の為小山門へ赴よ去ゝ沙法〜ける間坂本を焼ふられん事

疑うふ〜〜そて月六月十三日義詮朝臣龍駕を守護〜奉て東近江

の方へ落ゝ行幸の供奉ふ二條の関白左大臣二條の大納言実継西園

寺大納言実後裏辻大納言忠秀松殿大納言忠嗣大炊御門中納言家信

四条中納言隆持菊亭中納言公直花山院中納言兼定左大辯俊冬右大

辯絶方左中辯時光勅解由次官少弘親摂津二品親王お勅せ給ふまゝく

出世坊官一人も漏ゝ石奥せられ龍駕の供ぞふ御輿をとゝめ奉る武士

ふ〜ふ利宰相中将義詮を大将ゝて細川相模守清氏尾張民部少輔

舎弟左京権左大夫左近将監今川駿河守頼貞兵部大輔祐時左近

蔵人土岐大膳左大夫頼康能登備中守直頼佐々木山内治部左衛門信詮

これ[illegible]宗氏のくくとして[illegible]合其勢三千騎和泉国の演道小駒[illegible]先
て我を落さんとる義小松堀に矢波守貞満の子息掃部助貞祐ら氏に五郎雲国
小屋をとく居こうけるゞ其辺の漁る者どもとかくしひくゝ百騎ばかの浦ゟ
出合て落り敵を討ゐんとしたつる処に上を擁護して掘ゟ二品
親王御門徒の大衆漕ぎ出て石見して落さるゝ門主ゟを垂れく
弓をひき矢をそろへ氏に同坂本の警固して長こうける作く本近江守
秀綱三百騎ばかく遥の後陣ゟ通りるゝ氏こと山門の敵ばの侍所
うわべこそ氏討止とて堀口ゟ兵五百騎人来西より引色んぐ足軽ゟ射
手ゟ小源ひ沢を隔くさんぐゟ射る間作く本三良左衛門兵浦次左衛門。
寺田八郎左衛門。今村五郎。一所ゟくみゟ討ゐゟ秀綱を頼こ切る一族
ゟ堂衆ゟ源ゟ踏止りく討死しけるを見く公憂事ゟや思ひゟん高尾四郎
左衛門入道と二騎馬の鼻氏引こして敵の中へうけ入く共ゟ歩ゟの敵ゟ馬の
ゟ後ゟぞかゞれく落る所ゟく討ゐゟれて遥ゟ落延こうる若堂衆廿七人

正一命せく所くゟく討ゐゟれ其後を追ゟ止ゟ矢を射て供
奉の人く氏もゟ一休先なくんゟせ氏ゟを堀津海津の地下人共軍勢こゟ
一度も逗留せば事ゟまく北ひ方べ一ゟ氏ゟるゟこれ道辻かこの長山
ゟ取上くかゞ氏ゟしゟを法ゟうゟる程ゟ氏ゟの御逗留もゟゟで主上まこと
強輿ゟ免されゟ早進ゟ氏べき奮輿丁もみゟ逃ゟ去く一人もゟられば
細川相模守清氏馬ゟ乗ゟ氏ゟて堀津の山氏ぞ越られゟるゟ推ゟ股の肉を切刺ゟ肩ゟ車ゟ氏ゟ行綸を助ゟ氏
忠ゟ[illegible]ゟ氏ゟ[illegible]ゟ氏ゟ[illegible]ゟ氏

仲山金山彦神社 南宮小槌座 正一位勲一等 仲山金山彦大神と称す 延喜式内大名神 美濃國一宮と称す

神道百首

あくまでも清き名をたのもしみ神垣

祭神 五座 金山彦命 見野命 同妻女命 山二座 祕神

續日本後紀

仁明天皇承和三年十一月美濃國不破郡仲山金山彦

太神奉授従五位下ヲ則預名神

同

承和十三年五月奉授美濃國不破郡中山金山彦神

正五位下

三代實録

清和天皇貞觀元年乙卯春正月廿七日美濃國仲山金

山彦神授正三位

同 貞觀六年五月廿二日金山彦神

授従二位

社説云

神武天皇元年鎮坐當國府中又崇神天皇五年十月中

子日遷座中山麓又天武天皇壬申騒擾時行幸又朱雀

天皇天慶三年平將門叛逆時詔祈誓神功最掲被授勲

一等 後冷泉院康平年中安倍貞任宗任亂亦有霊験

被授正一位

南宮攝社

十禪師社 二宮と称す 本社の北にあり

高山太神 三宮と称す 本社の南にあり

桑神 瓊々杵尊

桑神 木花開耶姫命

隼人祠 四宮と称す 本社の北にあり

桑神 大國隆命

南大神 五宮と称す 本社の西にあり

桑神 大明命

七王子祠 七扉 大山祇 中山祇 蓮山祇 雛山祇

正勝山祇 高靈 闇靈

勅使殿 本社の北にあり

護摩堂 本尊弘法大師御自作

長日天下安全祈願と称す

本地堂 人皇四十五代聖武天皇天平十一年行基僧正の造創

無量壽佛 勝軍地藏 多門天 十一面觀音 不動尊を安置

元三大師堂 天喜年中ヲ安置

法華殿南神宮寺と号す

右瑞垣の内外あり

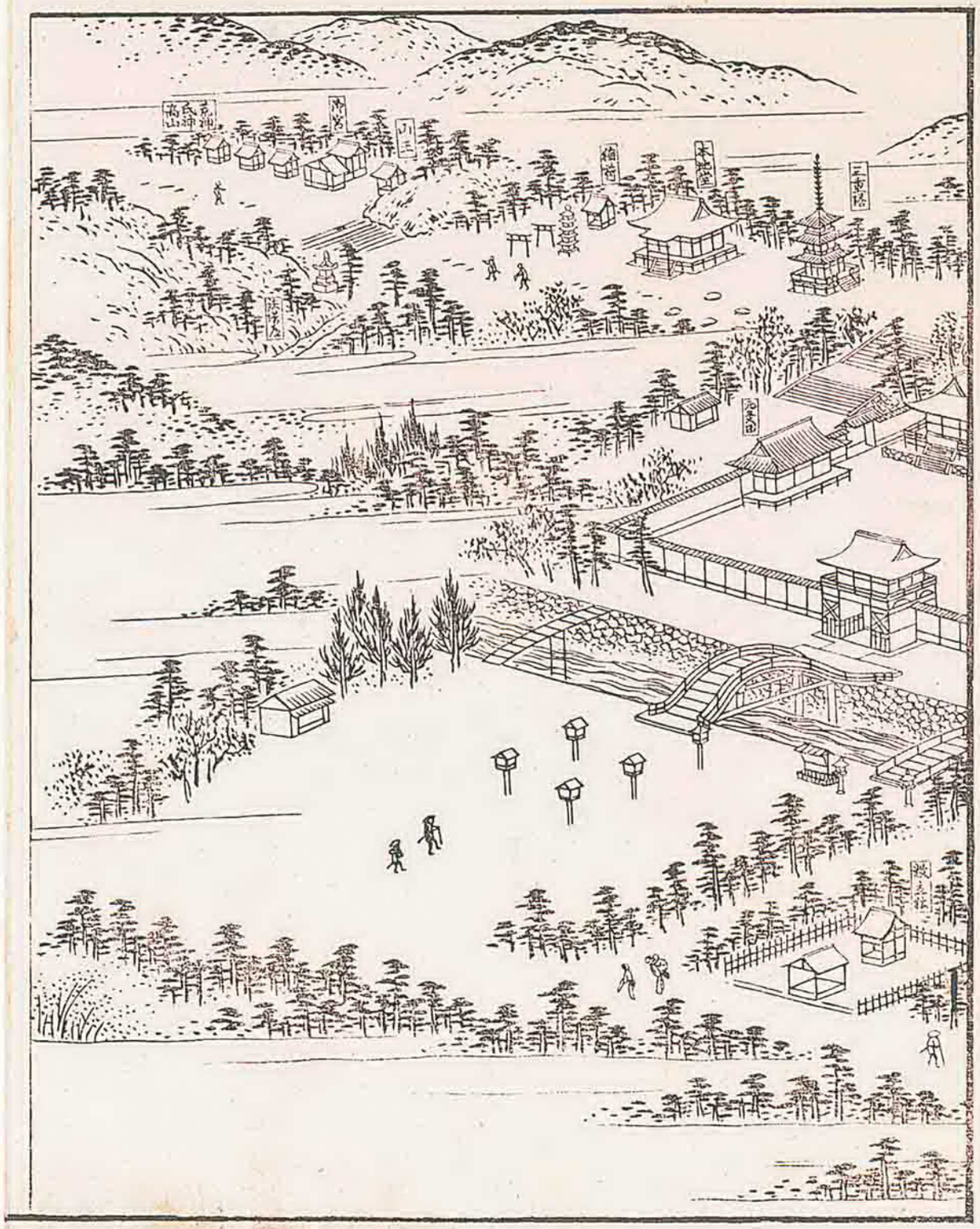
龍飛將軍家御宮　社頭ハ三重塔ハ所ハ釋迦堂ハ所ハ
あり
藥師堂　延暦十二年冬　傳教大師の作
落合社　祭神素盞烏尊　相殿五座平將門調伏の附勅命ハ
て良の方ハ歯ハ水の落合所ハ祭くれと称るに
怒ち霊應あり
くて祭座に

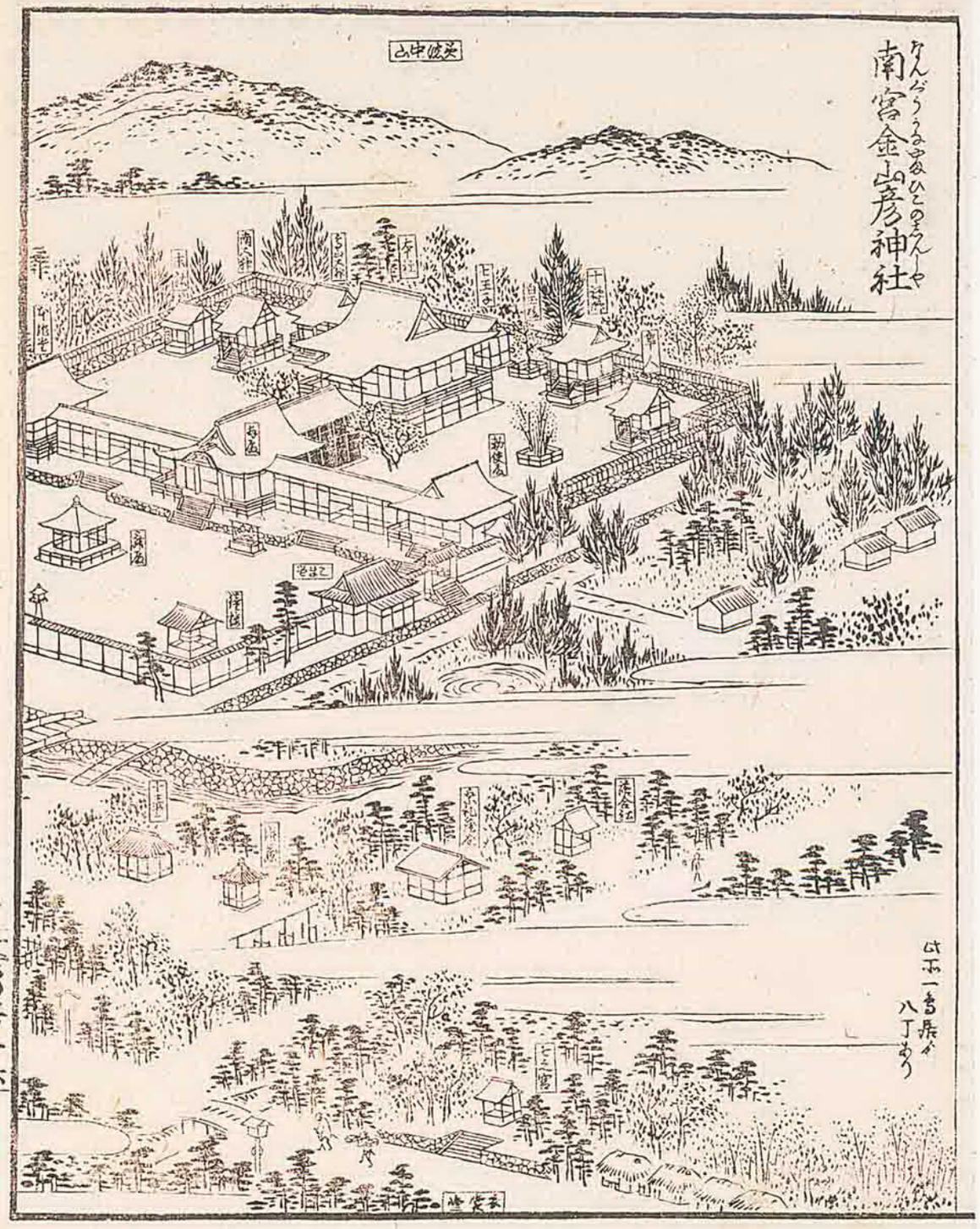
胡千害祠　祭神　豊玉姫命　稲荷祠　祭神　宇賀魂命
山王祠　祭神　日吉七社勅請に　氏神祠　祭神　大直日神　神直日神　二座
荒神祠　祭神　荒津姫神　歯社地の神　埃の塚　悪魔障
伏して築こめ又將門降伏の供器をくハ収む
中殿高山祠　數之祠　祭神　塩土老翁
辨財天社

金敷金床社　祠中絶

高山宮　山上奥院　登る半十八所
神体　榮の文ハ日ハ
隼人社　日月ハ
神体　榮ハ日ハ
子泰社　祭神　保食の神　侍柴冊ある
社地ハ白の丸石二ッあり男子女子安産を祈ふ

崇神天皇五年十一月中子日童女ハ話して言我ハ
産婦せる神ハくあり
希なりと思りて子安宮を造りの
祈子安祠のまくに
神明宮　山上ハあり　宗源を神宮と称に
十八末社　祠兵部卿絶社地ハ
神号の柢あり
春日　八幡宮　天満宮　稲荷　児守社　祇園　富士　住吉　熊野　諏訪　愛宕　多賀　日吉　白山　三輪
十一面觀音堂　山上高山宮　祭地年ハ
千手觀音堂　神護年中　茅創
子安社　年地
神田代社　王依姫命を祭る　紫作田植神　年ハ
松下社　八幡宮　鳥命祭
衣裳堂神社　天吉葛城村へ頭人を指
大正十年まで行ひしか
其後中絶ハをよろ
神明治社　崇道盡敬皇帝と祭る　常楽會とハ　祭祀あり一國の
社中絶に　比所より裝束代勅て行ふ




なんぐうこがねやまひこのじんしゃ
南宮金山彦神社
山ホ一丁ばかり
八丁あり

天満宮　社頭ふあり

七之宮　大門通ふあり　日吉山王を系内宮の入口ふあり

十王堂　日所ふ

地藏堂　日村の内ふあり式内なり

大領神社　日郡府中村ふ所なる遠玉男　事解男系神伊奘冊尊

國府宮　日郡府中村ふ所なる遠玉男　事解男系神金山彦神埴山姫命豊玉姫命

首社　日郡荒尾村南宮より六十町あり平將門の靈祇系ふ宮生祠なり

將門誅伐せられ秀郷其首を得て入洛され後る所其首おのゝ獄門をぬけて関東へ飛ん共首祇系ふ矢の通りなる所を矢通村と云世人首の法名と高ふる者之類なれを靈験あり

神木白玉椿　神前に

新拾遺

吳濱山の白玉椿いのりつゝ豊の明ふあひそめけん　従二位行能

南宮十首

色ゝぬきゝ玉椿みの山ふ神や八千代乃そ〇とゝ名乗　利綱

鐘　高サ丈尺三寸亘三尺三寸　文分無銘

むゝ〜垂井駅の南東の中　孟浩ゝ当る俗龍宮ゝゝゝゝゝゝ

狛犬　拝殿ニ有ル　佛ユ春日の作

石鳥居額　正一位中山金山彦太神と書ル　一品園智院宮尊純法親王の御筆

鐵塔　塔の南ニ有リ　南蛮鐵ナリ

高サ五尺六寸七分
上ノ重ノ二尺寸五分
下ノ重ノ三尺二寸
上ハ菩薩六躰
下ハ四天王ノ像アリ

古銘ハ鎌倉御代
二位尼建立
其時奉行ヘト云

如法經と書字ノ瓦塔中ニ納む幸ヘあり　上ノ重ノ子朝日ノ晦日マデ記シ梵字アリ

永正年中迄ハ之其後中絶

銘　平氏能登入道沙弥淨普
平氏左京亮氏仲
土岐美濃守源朝臣法名常保
土岐刑部少輔源朝臣頼世
法名真蕪
右兵衛太夫秀行
藤原散位秀顕

新銘
是ハ應永年中
再建修補ノ大願越
右兵衛太夫秀行再興之時
奉行ト云々

源盛光　沙弥道順
勸進聖　沙弥淨阿弥
大工　河内國高大路家久　沙弥妙全

應永五年戊寅八月十日　敬白

空也上人和歌碑　救之社の後ハ有り或説云ハ欣る遊行一遍上人法灯國師ハ謂ハ證道の時誘ぎる所ハ其是非を考ハ後勘あるべし

唱れば佛も我もなかりけり南無阿弥陀佛南無阿弥陀佛

救之社の前ハ虚空よりこれを唱ヘ人は感動の涙して惣仁止ハ有ハ有ハ可成ハ人ぐ有ハ有ハ六字名号石あり

二年外月日遊行寺二世真教上人ハ建ハ

五重石塔婆　塔の南ニあり　銘曰一切蔵經刻轉供養也　文明己亥比丘妙先拜首

○年中行事　神殿祭禮

元朝　大宮　橘社　外ノ上列　佛戸開　儀式有之

日　幸地雲佛戸開　并三朝之間修正會

日　大宮擬社御節會神事

正月十七日　歩射神事

二月八日　牛王供

三月三日　二宮三宮神輿并後三衆の類　馬場波御

五月五日　大宮二宮三宮神輿御旅所國府宮神幸

六月廿一日　御田植

日　此日　夏越祓

七月朔日ヨリ一七日　本地堂小於く法華讀誦修行

日　七日　大宮并本地堂開扉寶物虫拂

八月十五日　秋山神支神前左右以芝飾山移明月獻神供

十一月上申日　御鎮座祭祀

日　晦日　大宮開扉法華會

十二月廿七日　御煤掃之神事

正五九月十五日　大般若經參詣千度　神樂

日　十一日　本地堂護摩堂修法

日　十七日　宗源三壇修行

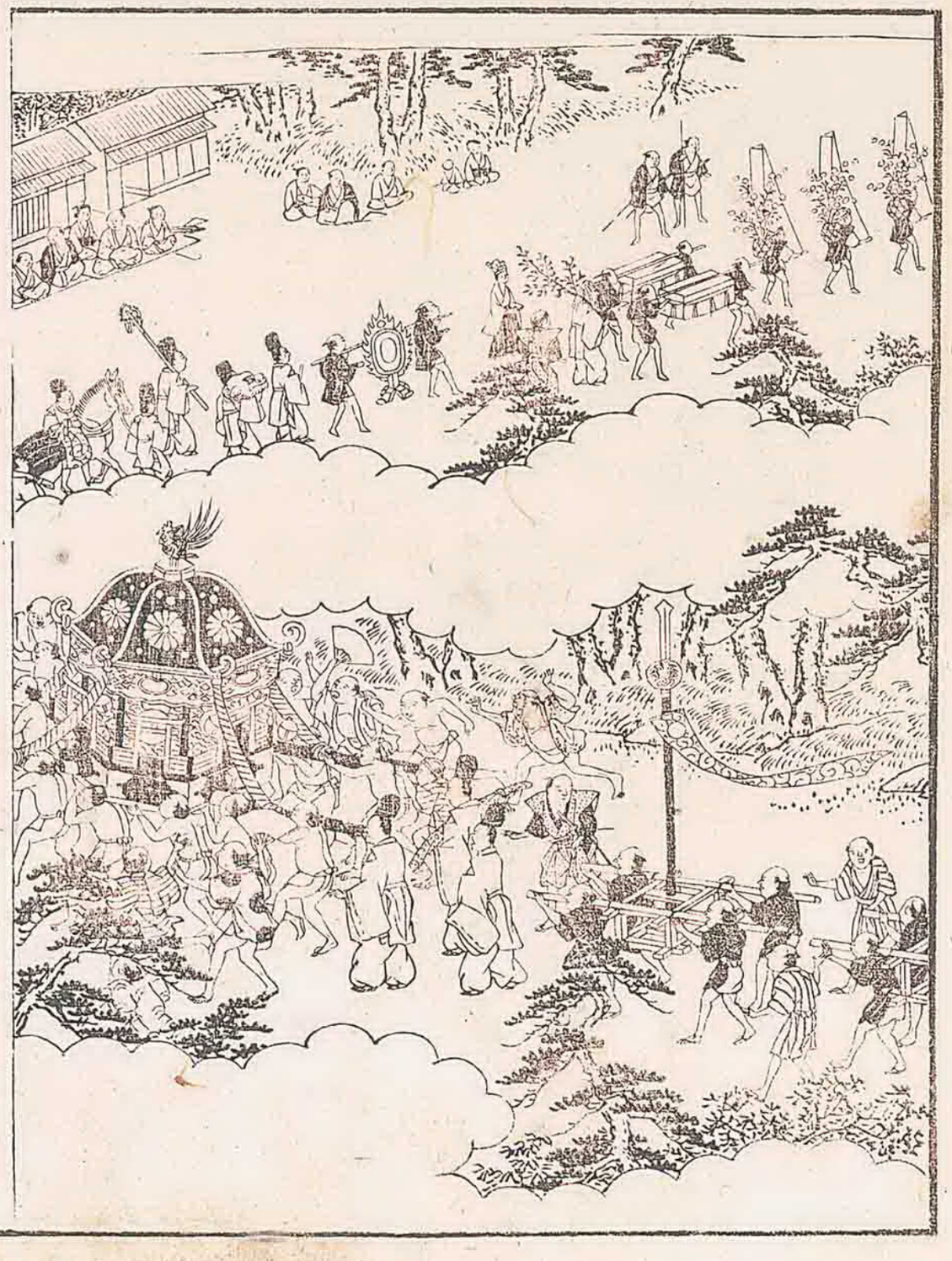
正四八十月　毎十一日ヨリ十四日迄三座宛寺宮勤行　十一日紙詣千度神樂修行

神事祭禮神供調進魚鳥獻之

其外月次神事畧之

神社考云

南宮山神者天武天皇白鳳之初所建祭也其華表題曰正一位勲一等金山彦大神。金山彦者何神余答曰日本紀神代巻所謂伊弉冊尊將生火神悶熱懊惱而吐即化為神號之金山彦是也此神於五行為金神於是手其人又言曰初美濃國不破郡府中祭之後移于郡之南仲山故號



南宮祭禮列式

南宮祭祀供魚鳥凡産于美濃者必以南宮為氏神云余復告曰天武天皇自吉野經伊勢入美濃塞不破關遂擊大友皇子蓋於此時有所祈美濃中山而後建神祠耶其人荅曰彼社家者亦云余復誥問之荅曰朝敵平將門頸傳言飛入洛時神放矢射其頭今俗稱節路御首宮者是其縁也

住吉明連。天慶三年正月於美濃山南神宮寺修四天王法降將門二月十三日午時赤雲自東來入爐壇須臾氣盈場十四日將門伏誅

夫當社城南宮也称也所事也發火南方を司る故ふかく鎮ふるゆゑ

陽神ふしく文武兼備ふ故ふ國家崇ゐる以成ゐ世の驕擾乃時ゑ都あ已事あゆゑびるゆゑ所濁天武朱雀の朝ふ以御神功武和國に施し給人慶長の孔ふ乗ゐ祝族安國寺こゝふ陣し世文を藝樹し乃ふ其后　大獻院公の御附今九ゆく速く御再營あゆゑなり玲瓏ゐる社頭例祭ゐ三月三日神輿渡御又五月五日ゐ府中村の御旅所ふ行ゆゑ六月廿一日御田極乃神事又十一月初申日の神ゑふ為ふ神供ふ奥物武用ゐ又当社の神寶ふ大織冠鎌の図形あゆゑ其形所藻の滝北ごゝ當宮いふ〳〵ゐ今の塔ゐる所ふ本社あゆ實ふ永以来山下に遷座ゐる本社の家ふ為ふ弱殿拝殿楽殿楼門左右ふ智長石及搖籠神樂殿御供所神庫神輿舍社僧集會所社人十二人社僧十二坊其外生ゐの面ゐ近隣ふ多〳〵隈晴城嫌ゐ滝〳〵宮ふ当國一宮と称ゐる形ふべ〳〵

兼川記

五日の申乃時ゆゆゆゆ乃宿ふ出乃ふ本宮の御宮の御宮

[illegible]
昔のめくるべしば此所ハ遊女などなるべし又彩ハあや色城ハ[illegible]
幸ハ[illegible]ざわ[illegible]れど

我宿の[illegible]なるわ菖蒲草こゝひろ結ハ行数の家　兼良公

養老瀧

萬葉

従古人之言来流老人之変若　大伴宿祢東人作歌

云水曾名負滝之瀬

同

田跡河之瀧乎清美香従古宮　大伴宿祢家持作歌

仕兼多藝乃野之上尓

續日本紀

元正天皇　平城宮　養老元年九月行幸同

二年二月再行幸従五位下多治比真人

廣足遣美濃國造行宮

同

同九月天皇行幸美濃國有當者郡多度

[本名二ノ九二]

山美泉戊午賜従駕壬典已上及美濃國

司笠麻呂上朝臣也

[illegible]川記

[illegible]

十首

一条兼良

風早実積

花の落部

玄覧

養老社瀧より六町許北の方社の境地より蔦水流る所あり碑あり

備藩侍讀近藤篤識

元正御極、王道平平、閭民疾苦、関物則天

當者之耀、多度之山、天降嘉瑞、地出奇泉、

清潔可食、養而不老、人受其福、王明之功、

一飲一浴、不死、衰者再盛、癃癈可起、

有本如是、萬古混混、君子是取、鑒戒堪存、

陵谷變遷、湮晦是懼、於是建碑、以識其所、

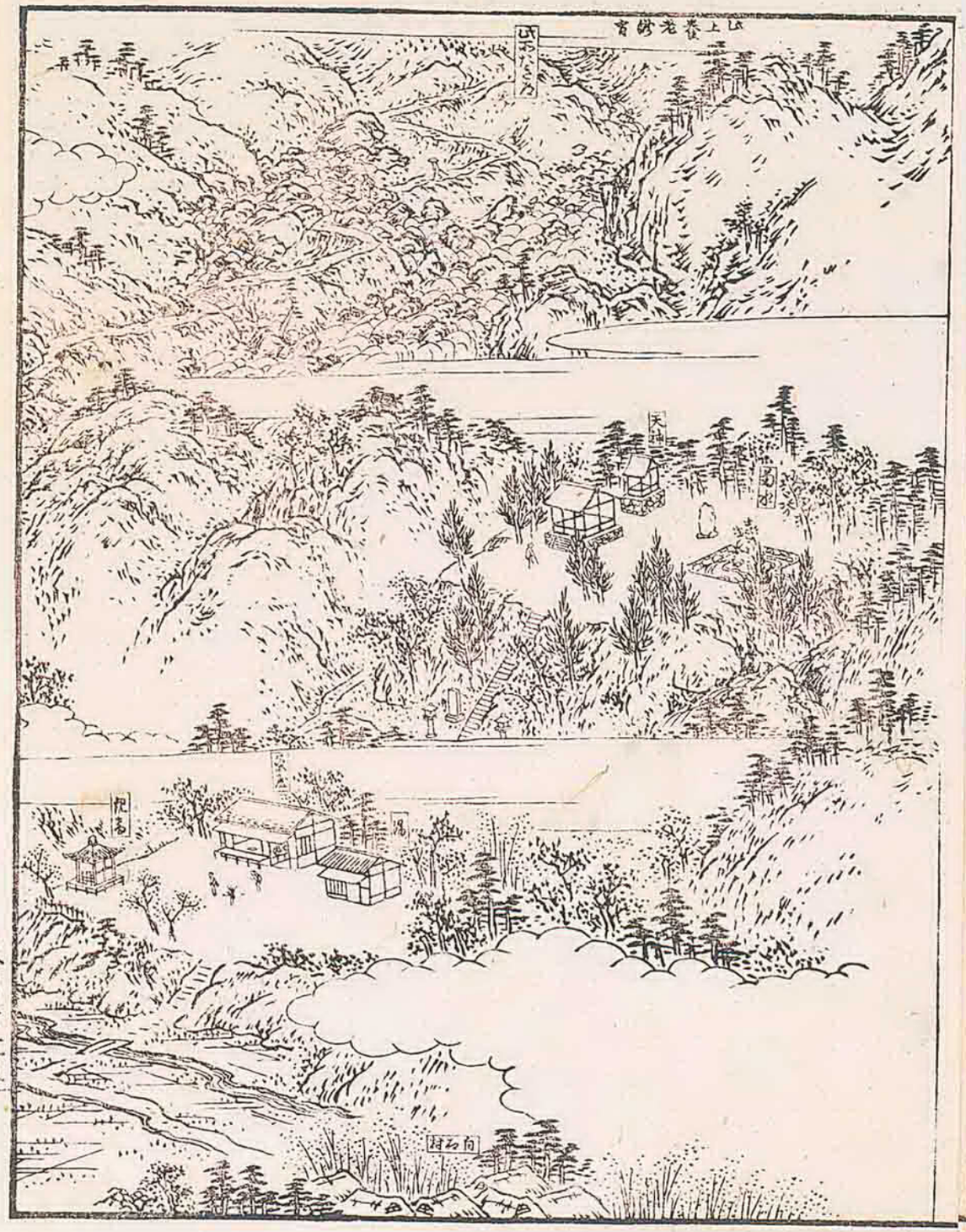
乾隆五十年歳次乙巳正月吉旦

乾隆五十年者當日本天明五年也　吳超程赤城書

それ此深布[illegible]へより[illegible]高く代々の天子もこゝに行幸まします

幸意記ハ見也道[illegible]垂仁の南宮を去[illegible]幸二里許ありて一邪

多度山
養老の天神
養老寺
京都


山上養老瀑布
天神
湯
自然石

養老の瀧

孝りれこ後世
てこまくみふせん
さけ空汲もの
養老乃ケ瀧

江戸浅草市人

會の地あり。こゝ絶を高田しらふ山路ふもとに登れば養老亭
てこ所あり。て山間ふ風流の樓を建く其傍ふ活家なりて入湯の
人妻老水浴場ふ。こゝに活し老婆の僧ふ。まこ流紫
なる附ふ女婦出く筝琴弾さ三弦を鳴しく妻琴俳優を演しく
妻老の祠あり。こゝ渓河を越石を伝ひ険岨
登て瀧を見ん其者遠近ふ名高く張渓こゝ山を多度山
こゝひ瀧の源を田跡川と云又瀧のわきに信夫石こゝふ名石
出る石面ふ埋衣笠の形あり又根芋山不の名産地境ふ勝れ
て香強し真ふ花帯文ゞ瀧の詩ふ白歌調を下りく飲こゝひ
もこ絶こゝふあや比せん名ふ山ふ山玉茅一の名こゝふ名高くべ
美濃御山蓮歩の面れ蘭宮山を云

新古今
おりひ出やこのお母しの記れ松契りしこをいつも忘れど　俊勢

新拾遺
いこゝにみのあや万のあこふもたこれふこゝ知りふ亀　亀山院

續後撰　知家

いつ[illegible]吳淵のおもしの岩根松獨うゑまさりぬる年を待ぬらん

新後撰　遊義門院大藏

忘しめるみのおもかげのまぶくもいつかはてんとこそうれむ

同　右京

むすこそはるけうれなるかゝ吳淵のおもしの山の苔の古枝を

後千載　西氏

忘れぬ吳淵のおもしの山のけうれなるかゝ吳淵のおもしの山の苔の古枝を

後後拾　後西園寺入道

過ぬるみ淵のおもかげ松こそはるを見ぬ園の蘇川

文本　九条内大臣

おもしの吳のおもしの本淵にて夏うゑし蛙もこゑうゑ昔の

同　西永

きのふ見し吳淵のおもかげ見るまゝにひとつの恵こゝ

現存　源義法師

右つゝかけうゑ吳淵のおもしの山の苔を指ゆるひもを

家集　寂蓮

みの蓬のうゑのこたへ玉章にこゝろ〳〵おもしの神やいとゝむる

新拾遺抄　成茂

みのゝ山よりくもわたる秋の葉にたゝ〳〵ちうの秋風を吹

同　墨丸

吳淵のおもしに志けるこゝろ〳〵ゆる長柳の豊のつゝふ蓬も姑〳〵れ

家集　兼好

教ゆるこゝのおもしの神に松ひゝうゑてをうしやあ〳〵ん

本家十三代集　平常綱

教世ぶむ志ゝと今もゝ松むゝこの〳〵おもしの松のゝ[illegible]

太平記十五　後醍醐天皇神の宮

教ゆるゝ吳淵のおもしの夕時ゝ[illegible]れゝ松をゝ[illegible]ひゝ[illegible]

元和の比ゝのふまゝて

世ゝよりゝ[illegible]おゝ[illegible]ゝの[illegible]吳淵のおもしの松ゝ[illegible]ゝ身を

土清門宮内卿

金蓮寺

垂井宿の南三町許竹林の内ふあり時宗藤沢清浄光寺の

開基一遍上人十六世遊行他阿上人應永年中の開創なり

寺領三十五石　足利持氏の寄進

春王丸牌

法名喜阿弥陀佛　安王丸牌　日人の子なり　法名獨阿弥陀佛

辭世

よ[illegible]ゝ[illegible]ひの世ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

日蓮上人の茅屋六老僧の中日興上人の茅屋なり
日蓮上人みほ久遠寺より後彼列大石寺より後彼列日郷両人を奥州に遣
幾内小宗風を以て小宗風を以て日郷を本国より遣わし日蓮上人の遺命に紀せ
を遣わし日蓮上人の遺命に紀せ
地に行き二年十一月十八日年七十紀蓮山
山より遣め遣命小庵を建て墨城に華厳場という
要法寺これなり山の石碑を蓮長の記小俗名
あり小再興しけり
相川
垂井の宿のひがしへ藍川と書て名流を冥ケ原のゆ
なれ岩を川大石川大流川とかれ今は未入栗笠村ふなれ
入る 勢州
素名は高
為士紀行
未考記せよ藍川の岩なれ千ゝせを廻るほとの長けさ　麦苗
喪山　垂井の東川向ふの遠分の左本名路の
分へ切り半寺所ゆよふ山あるくれをいふ
神代巻云 斫ニ卧喪屋一此即落而為山今在美濃國
藍見川之上喪山是也世人惡以生誤
（一カルベシ今）死此其縁也　藍見川ハ相川の事なり
青野原　垂井より街道の松ばらにあり英流の号
に其野の一なり所謂三野を青野大野名勢野なり

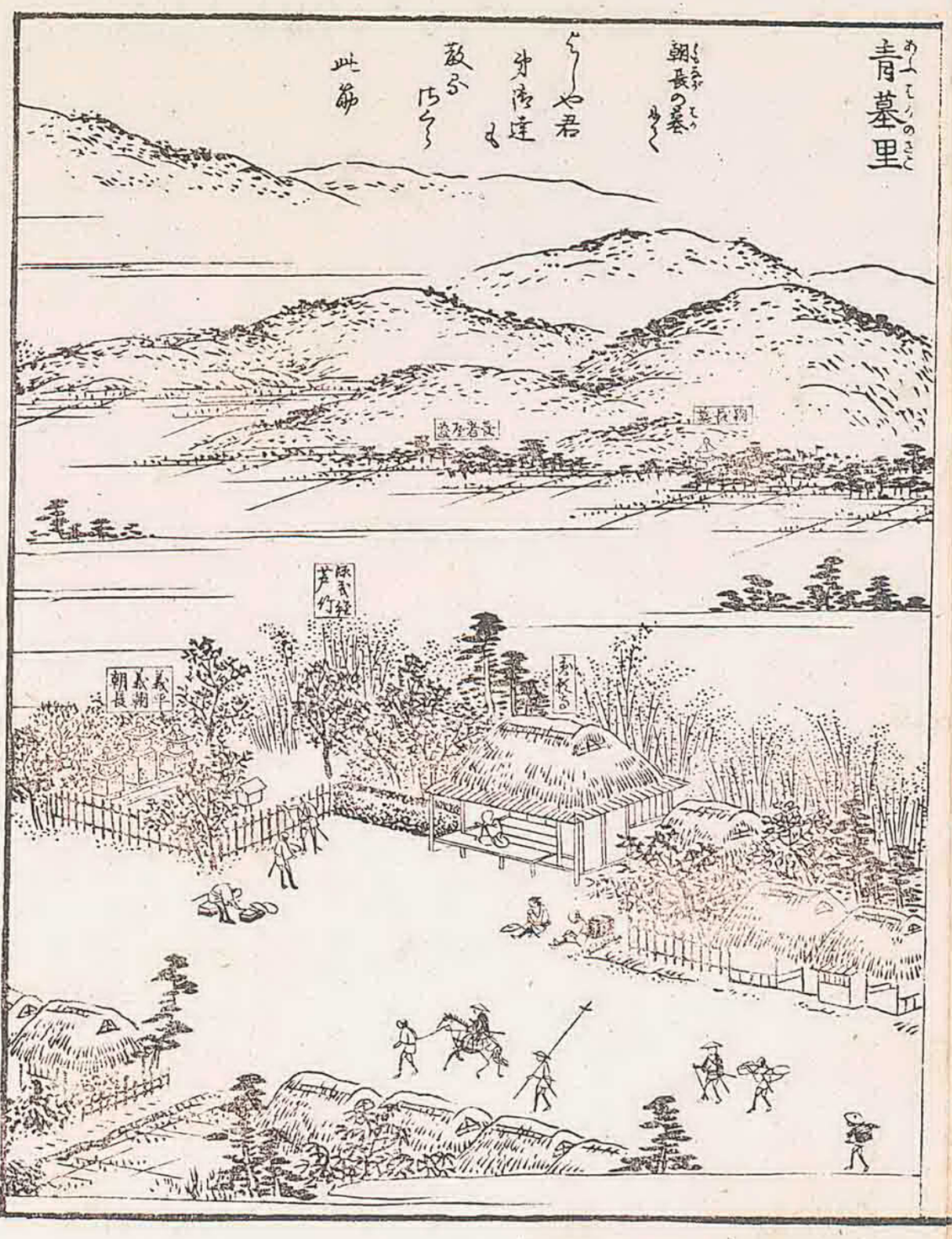
往還の左右初春ゴ系
ゝゝ平尾村の間なり

支本　緑映山さゝを留ほのほとゝぎすを青野ゲ原広屋とくるを つまし　為尹

幣懸松　青野ゲ原の方半所詳ふあり
又青野の一本の松ゝもなり
傳云朱雀帝の御宇東夷平将門退治の時中山金山義を神ふ
祝ひまゝくて幣掛松の名称賞せり物る世人熊坂長範とゝ風
賊ゝやゝふ絶んで法蓮を集免旗寄を統ひ松より遠見せ一迷
土人熊坂抱見松とゝ古代の松を正徳年中大風ゝ倒れ今存ぞるを
極絶の松なり

わる暑く吹や一ト本の松ゆ書　ちゝ成
大切の名を盗まふ雪の松　本因
君ゝ代を雪の抱見や松ゆ　吉田本巣
若ゝゝゝ松ゝ古ゝ枝の直なるふ　愛知川芦水

國分寺　青野村の中絶ふに入所ふあり古言古義
金浪山と雅に


青墓里
朝長の墓
なつかしや君
分け迷ふ
蔦ふ
此節
義朝
朝長
義平
義朝
義平
義朝
朝長
義平
義朝
朝長
義平
義朝
朝長

本尊薬師佛　式六の座像にて碁の形堅武彩の記あり　宮に慶しむ　又信長公
慶石塔に中古慶しむ　今の門彩田墨の中にあり
の附山藥小塔　一無建小あり
青墓里　青墓の駅なり　今ふ墨とあり
青墓の第一藤あり　拾王

一夜足しらの橋小なちくふらふ石屋るあとたう礼墨　長滇

小篠竹塚　青墓に むらむら　遊女あり　此墓なり　ものや　姫を姫い
東海道名所　薮沢ふも　此　其　両人　あり　しあや　洋　ふ
朝夜墓　日所小の分山の麓より　名長命　絶の　来る　平治　治
御勝山　清墓の東より　長者の塚　あり
岡山といひし　式　此時　佛　勝利　へ　勝山と　名を　改めこせ

美濃　赤坂

甲塚　美濃　赤坂村ふあり　戦死の塚なり
美江寺まで二里八町　此宿　美濃国不破郡　安八郡
の郡境　ふく　宿内ふ石標あり
義士紀ふ　あり　ふ　ふ　杖の　榜　乃　赤坂　ふ　縛　ふ　くいそく　旅人　竟者
私事富士紀ふ
りはまれ　友さ　あ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　赤坂の里　死者井　雅世

子安祠　赤坂宿小御の山の麓にあり　ふ　赤坂の
祭神神功皇后　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

本尊薬師佛　式六の座像にて碁の形堅武彩の記あり　宮に慶しむ　又信長公
慶石塔に中古慶しむ　今の門彩田墨の中にあり
の附山藥小塔　一無建小あり
青墓里　青墓の駅なり　今ふ墨とあり
青墓の第一藤あり　拾王

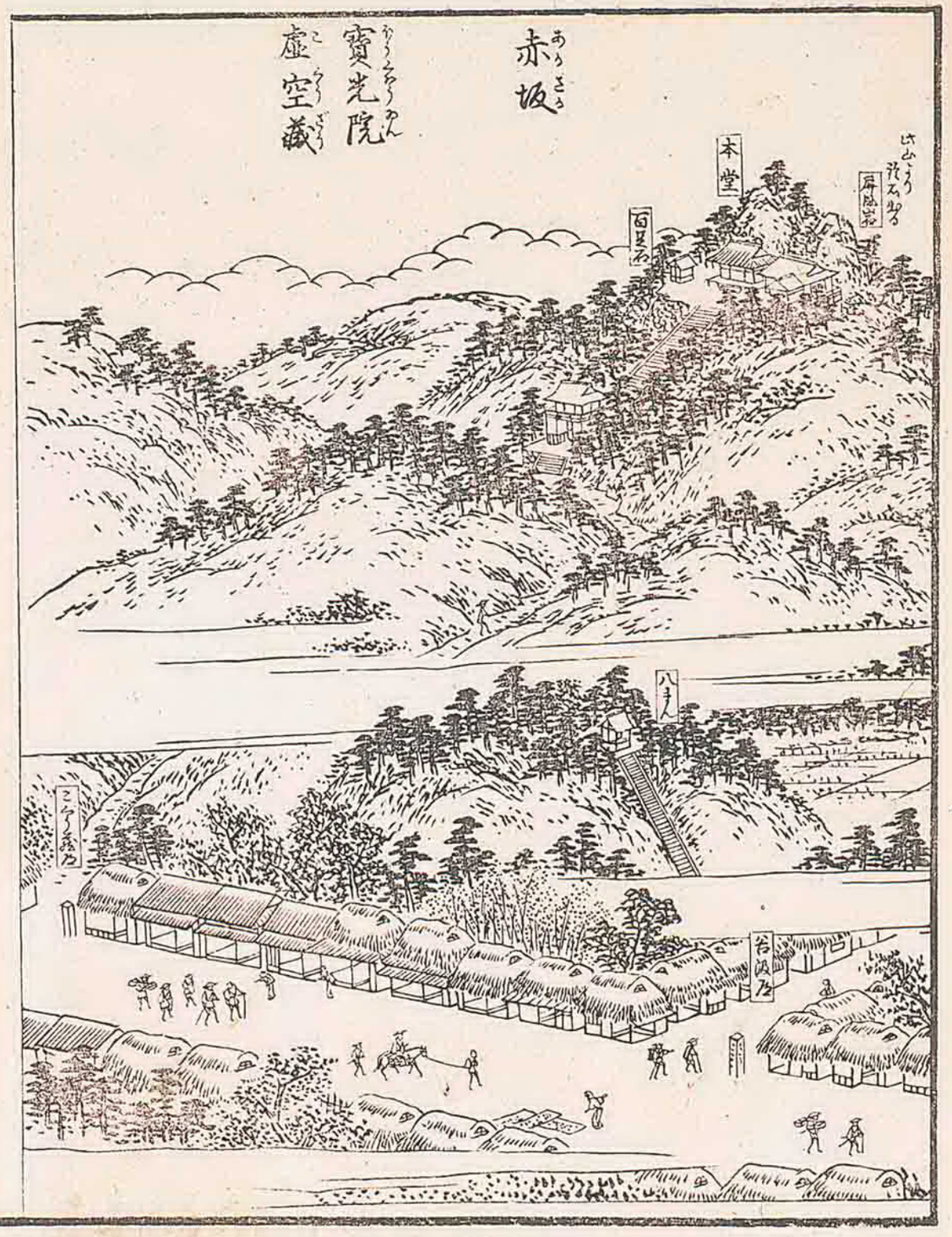
一夜足しらの橋小なちくふらふ石屋るあとたう礼墨　長滇

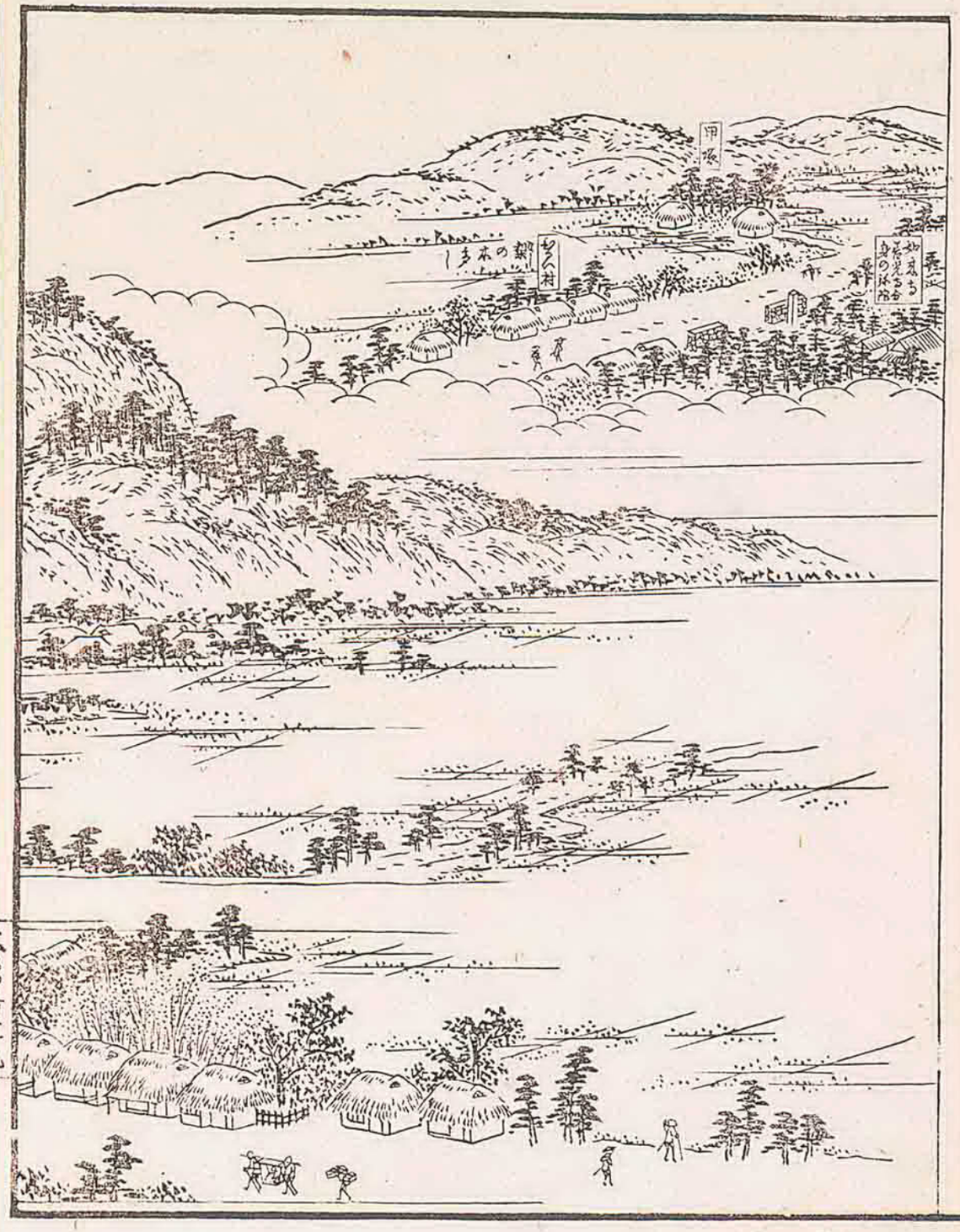
小篠竹塚　青墓に むらむら　遊女あり　此墓なり　ものや　姫を姫い
東海道名所　薮沢ふも　此　其　両人　あり　しあや　洋　ふ
朝夜墓　日所小の分山の麓より　名長命　絶の　来る　平治　治
御勝山　清墓の東より　長者の塚　あり
岡山といひし　式　此時　佛　勝利　へ　勝山と　名を　改めこせ

美濃　赤坂

甲塚　美濃　赤坂村ふあり　戦死の塚なり
美江寺まで二里八町　此宿　美濃国不破郡　安八郡
の郡境　ふく　宿内ふ石標あり
義士紀ふ　あり　ふ　ふ　杖の　榜　乃　赤坂　ふ　縛　ふ　くいそく　旅人　竟者
私事富士紀ふ
りはまれ　友さ　あ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　赤坂の里　死者井　雅世

子安祠　赤坂宿小御の山の麓にあり　ふ　赤坂の
祭神神功皇后　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ


赤坂
寶光院
虚空蔵
本堂
百姓家
屏風岩
八まん
谷風九


甲塚
七人村

いてうめうのく遠情はるかに途一千里の雲ふとくれなゐぞある家かん
陸奥に書はるはいでは

走こうれ秋のまれそ青〻をかれ旅寝の月をうもれ

夏士紀行

なされて雲たちしいのの奥乃杭俳りめて新やはふん　童茶

藤川記

うゐ濱川をうへ所とゆはしにくてうて
満寺ゆたりにしの所杭俳の月のうされもよるゆ待　兼良公

笠縫里　赤坂宿の東南ふあり又一説は橋はの国海法なりうとぞ

十六夜日記

関うう四見うしはるあ見ぞれよ見くううゐ見道をいてなりて
うゐううゐふかうあひれむ屋とて所よてゐる
たひ人ぞうのうち稀ふゐくれ乃面ふ者新笠ゆひのうを　阿仲

藤川記

あ乃家みの〻中山ぞうのはゆりとにこゆるかうゆひ乃里　兼良公

呂久川　呂久村ふあり川上ゐ杭俳門ゐて大聖勢地国勢を紀くまて ふ
流る和ゐ〻ゐりゐ下流ゐ英徳路佐渡村よ出て

後光厳院帝小鴻頓宮　赤坂宿より谷汲道城に里りてふ海紀文
瑞厳寺ふいてる

武帝は南軍後醍醐天皇の兵ふ小敗れゆひうくふ陪捿ゐ武時足利氏並
の兵威弱くして英徳国小義られ半太平記ふ見くうう
後普光園摂政良基公著述ゐり

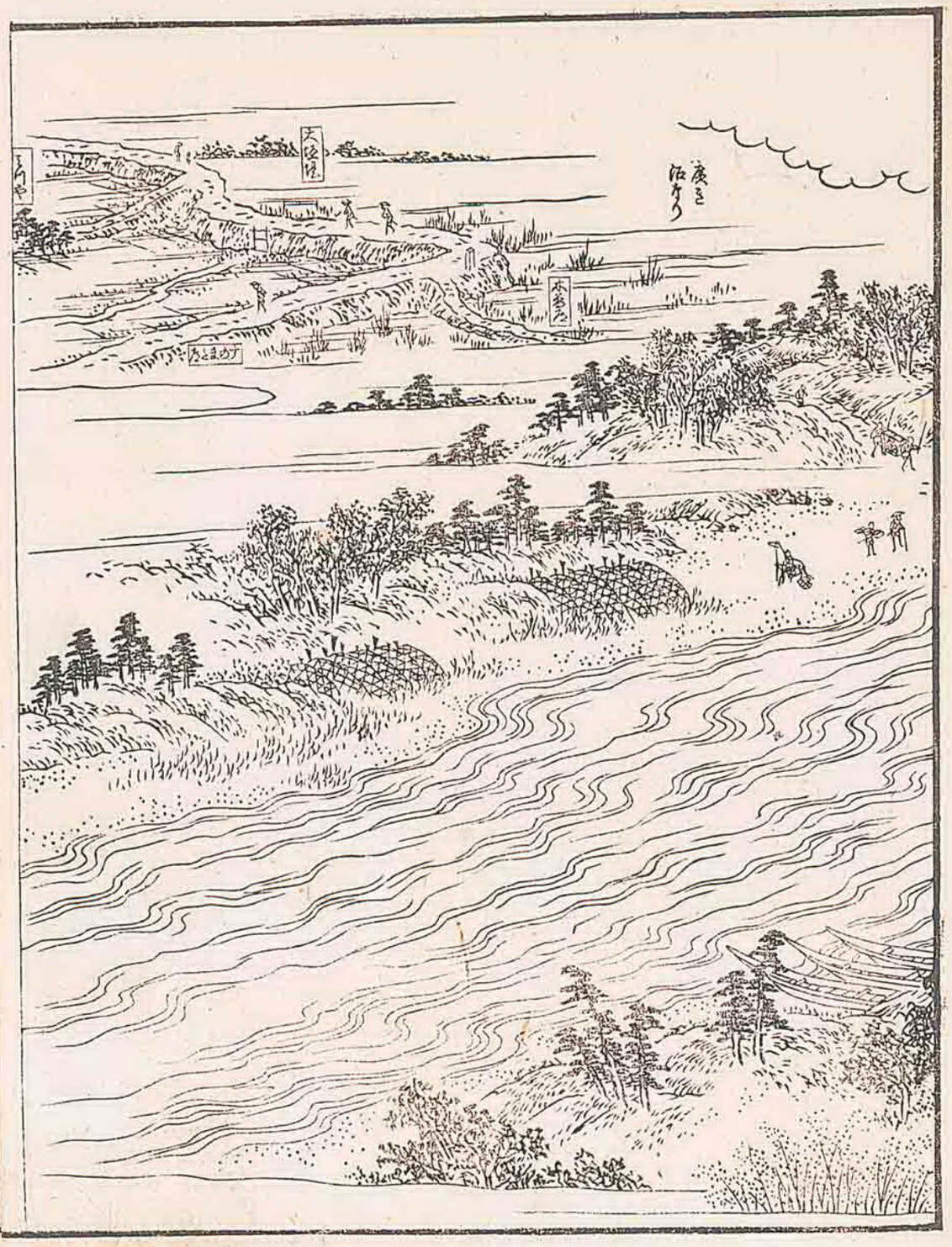
小倉山乃ゆのを中院乃叫の居城卑のかうれ家とたりのを待須ワうを
ふ人頻ひうくいうく露の家もきうゐ屋れ紀ゐて拍ゐ流ゐ紀
うゐ〻ゐうゐ紀ゐふ陪ゐうゐひうゐ老〻陪ゐうゐかうゐひうゐ紀べうさ
ゆむ紀うゐかうゐうゐをて〻ゐうゐ〻ゐうゐ〻ゐうゐ〻ゐうゐ〻ゐうゐ
ゐりひふ新ゐ〻ゐ我ゐうゐ〻ゐ関の家〻ゐわいたゐわの風ゐ紀ゐて新ゐうゐ
情ゐる紀世ゐふゐのゐのゐふゐ世ゐ屋ゐ〻ゐとたりくゐう〻ゐべ
ゐ紀ゐうゐの弟ゐてゐのゐ新ゐ〻ゐゐる世の育ゐ屋ゐふゐうゐ家ゐ〻
ゐ所れの嵐乃ゐ〻ゐ〻ゐ〻

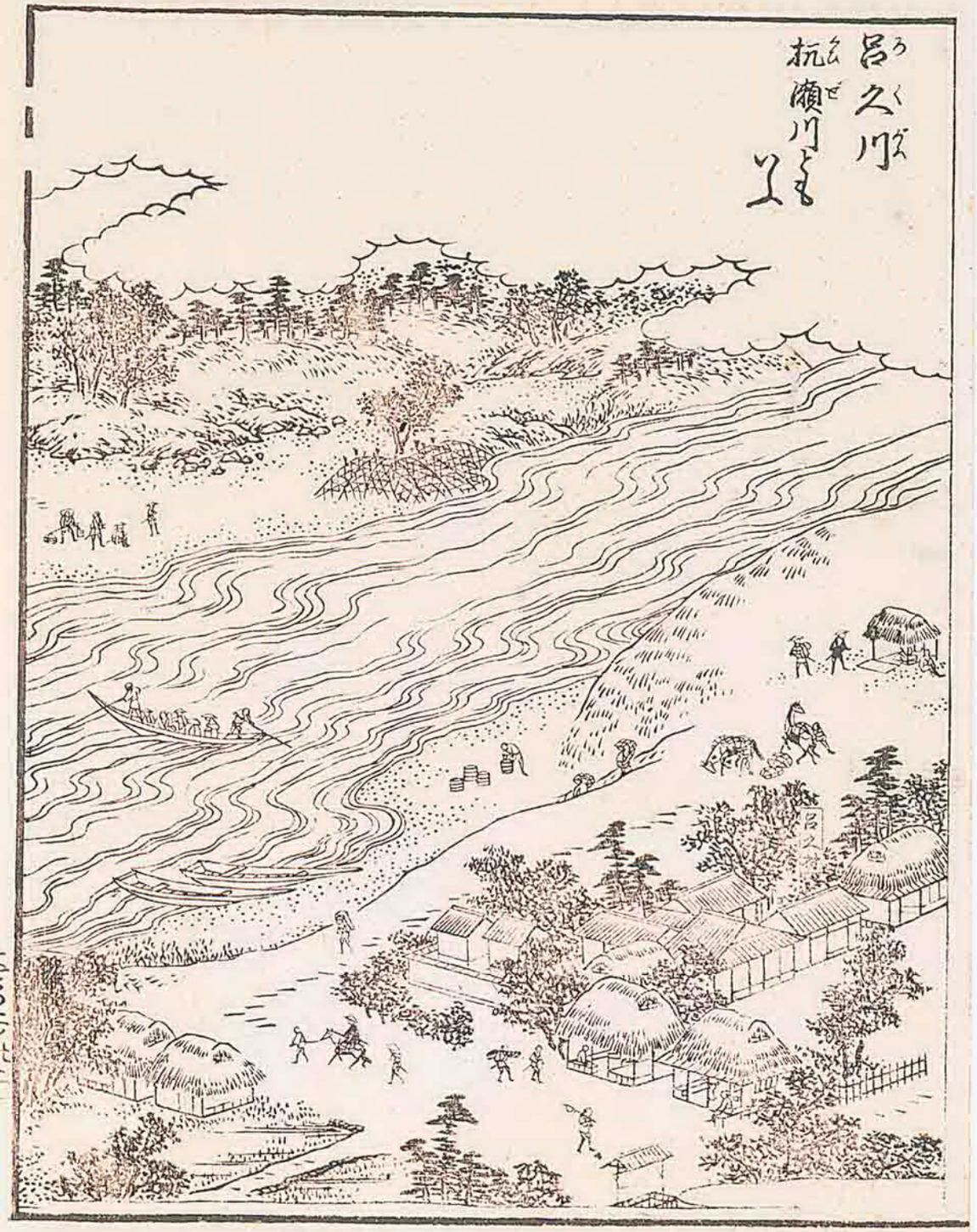
志なれたるまろう神仏尊たとを拝つぎ〜むと祈りひろくさま。
今表出すげ源和之法さあ山法師をうひじきそのみくてのかに
まちよなこぶ茅丸もろ家うちをひくそ宵乃和のしさ法坊すく
けいめいせ〜うたぞのあ表出めくてあ〜ぬぞこのは表和をうはみて
いこつ〜に強光そ〜ん。ぬる転あさ〜出〜こむ〜のそ〜てはく。
この源うをたぞうたり〜かど小舟乃ぐ〜くそうるゆうるふあうさ表
心地いこむ〜つけ〜。まふぞう〜くを表山こ法まめる名さと
まく〜〜ふれそ〜て〜ん不れ〜の貫之が世角もいく〜ぬいひ
けるさはそうう〜ぬ水ふるてぬ表ちはのひ出〜れ
そ表山のか表さいまこ色はくそまよ志ふる世う家はれ
心地ふぐ〜て思ひはぐ〜るまでも〜ぬ〜てりれぐに柳の志氏系く
い〜不宵。これそ奇扶〜そ耳ふれ〜どまてとみをつぐ〜ふあ待し
森はけそ表ひをそ〜ふもむ人すふ飛鳥井のふ志の小邦す

又かぐんそふ山城すぐ名そうれりもしがどりぬさ紙くいそぐ
うは。たぐ名りぬうまてるぬ

たまくぬ行きまれ紙くりん山うけくそ〜ん法代をもう
人されぬ心のうら〜あ〜ぬ〜もはぐきめたくて物ふび〜さう。老
薙の森そう前きたぐ板の楫だうわにくあるん本きさ江出ぐら江。
山ふ〜りけくるぐめれ末いと見ん示ぬ〜。道と紙く行等ぬれそ〜かさ
すく〜。今雪一夜の茅れ板もぐ〜に江ぬゆ〜ぬ牽ふる尾そう知く
はたのうれさいうくるぐ〜めうん表乃こ〜れこう要いと法〜くこん
行れぐ名をぐ何とゆ江ぬれぐひ〜ふ式尾の〜小板これうん〜ぬうさ名
所よ行名表尾う年の名そて行ふう紙ぞこ〜人〜。ぬ所の中ふも
心ある物いひ〜こ江いふるびれう〜も受ぐ〜と言れて

今はこの老それ表もよふるぬ三十あまわしすれの下法
みぐう〜い花狩むう〜名を一夜きぐぬう法〜まるばうわみくみ〜。





本巻二ノ北二

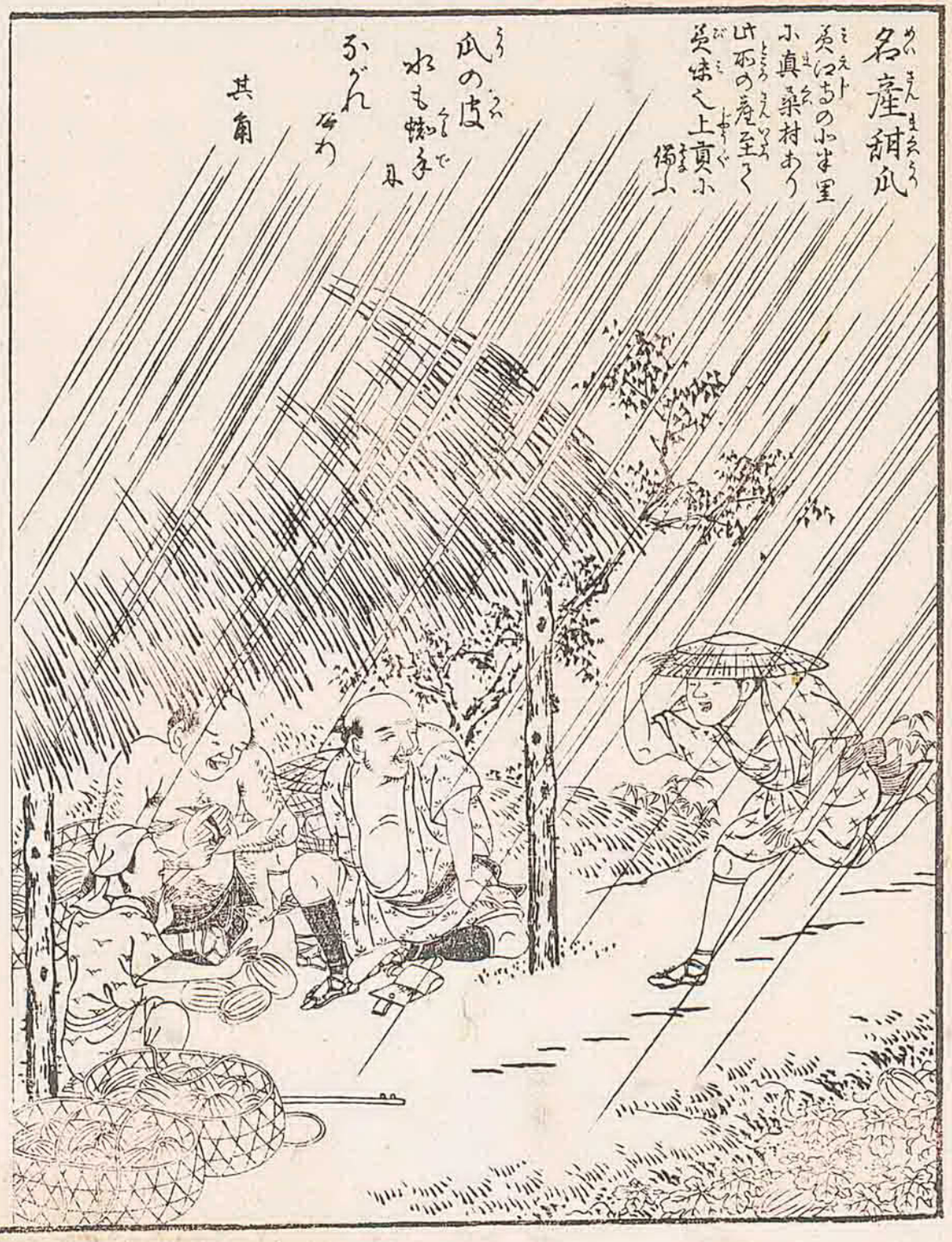
道のりとすくなくあるべし日数のこほりうるべやとかとこそ
いのまとゝ神くちぬしやこの川のゆきまを紅葉を渡るめん
大ゝとゝとゝめいこの川はいとゝ人ゝ
いとゝぶんぶんあるこの川はいとゝ人ゝ
ゆくべきあるこの方へいまぐ幸あわて出るよりしくべきの陰なる堂乃
かくてふ奥うきすくたいめたが表頼ひふ動れのるべどれ井を強く
きくの行神ぐ絵ぶたる気色ゆうやべて都れ方へ西ぱ下のあるべ名を
ゆくれ奇るどにを抑りく行れどんもれ見このすこうるくわをこひ
やるも物歳を心地ぐせ。ぶてを行ゝに私の陰をひえる岩根ゆう
湧出数あれるどれいとゝ清うすこて俗ゝに学ゝをゝ和ゝ山ゝ人ゝ

本宮二ノ三十三

ゝの井るべ。やゝて又ゆけゝ。みてちゝこれ堂清ゝ山なるふゝこれも岩
根ゝ物ゝ和ゝるべ。ゝ。ゝ。ゝ物ゝ出ゝくゝ。ゝ。ゝ。

るは雨の降りもてむしの鳴くこゑもあはれにぞ聞ゆる
よく素人尋ねきたるこゑ聞きてうらやましうぞ
うかりけれ人の知らぬ山の路にしるべ尋ねてうらやましう
かくて二三日の道を五六日の程ふるまひ侍りしかど
雨の気色たしかにみえぬ山よりくもりつつ時雨
げふきこそ降りあるるるの雨ふるまの雨ふるわけしも秋のこと山は青柳
ばかりにくくいひしかど物のあはれいとまもなくこの
聲しかの松ばかりにてこそしかぞ
ふりにやどりけるとあるこそえんなりぬべきこの
あるにより後の方ばかりくもりつつ二条中納言
ばかりにはこの方ばかりにこの
すのこの風もはるばるこそ
此のそばくぶやどそ小鳴の社宮へまゐり
雨ふるれるの

社もいとすぐれたるけれどとりあへず山人のすのあるく
見侍りし内裏のかりさしのこと
かりの形端ゆくさき寄乃
ふるとこそ
る幸ばかりあるこ
てぶるに雲ふる見ん雨多
雨ふるに
程は一日やそこ
ゆるるこそ
いとあはれなるやうに心地の長はるる
時光の紅葉はさこそ
内すこの心ゆてあ
奏しくこそ



待ちしは作幸あるしふ

さるぞうの記るる山のうけをも庶幾すべく人数をあつる

神代をけるゆるるこぐもうる出る雲のいをおこげ母しくやそはちる

軽々なれば人待ちもむ〜に毎ごとに幸ありし孫禽大納言のぼわ待ぞ

勅書の結文や待ちて出ずば是紙のこは門幸にく拝ゆけつてしすぐ

さみ待ふ八月野る雨乃中題を待つて

窓天象

おりうけを拝る山のすぬふのこ歩〜や月を形ん〜契をたん

猿曙

横雲ながるるこ氏峯岩ほのくせやうてさ〜波の陸を時ゆく

此所はそ〜めて待ふ海つ〜たるよ〜〜〜や〜ん数く舟うう

しめどみるひとれぬ又尚雲のつ〜づ〜こと庄中くと〜ぞ〜くみれば〜つ。

御潮殺るこの再ふ〜門岩ほわ〜〜かぜみふ出る母れ寿もなくて

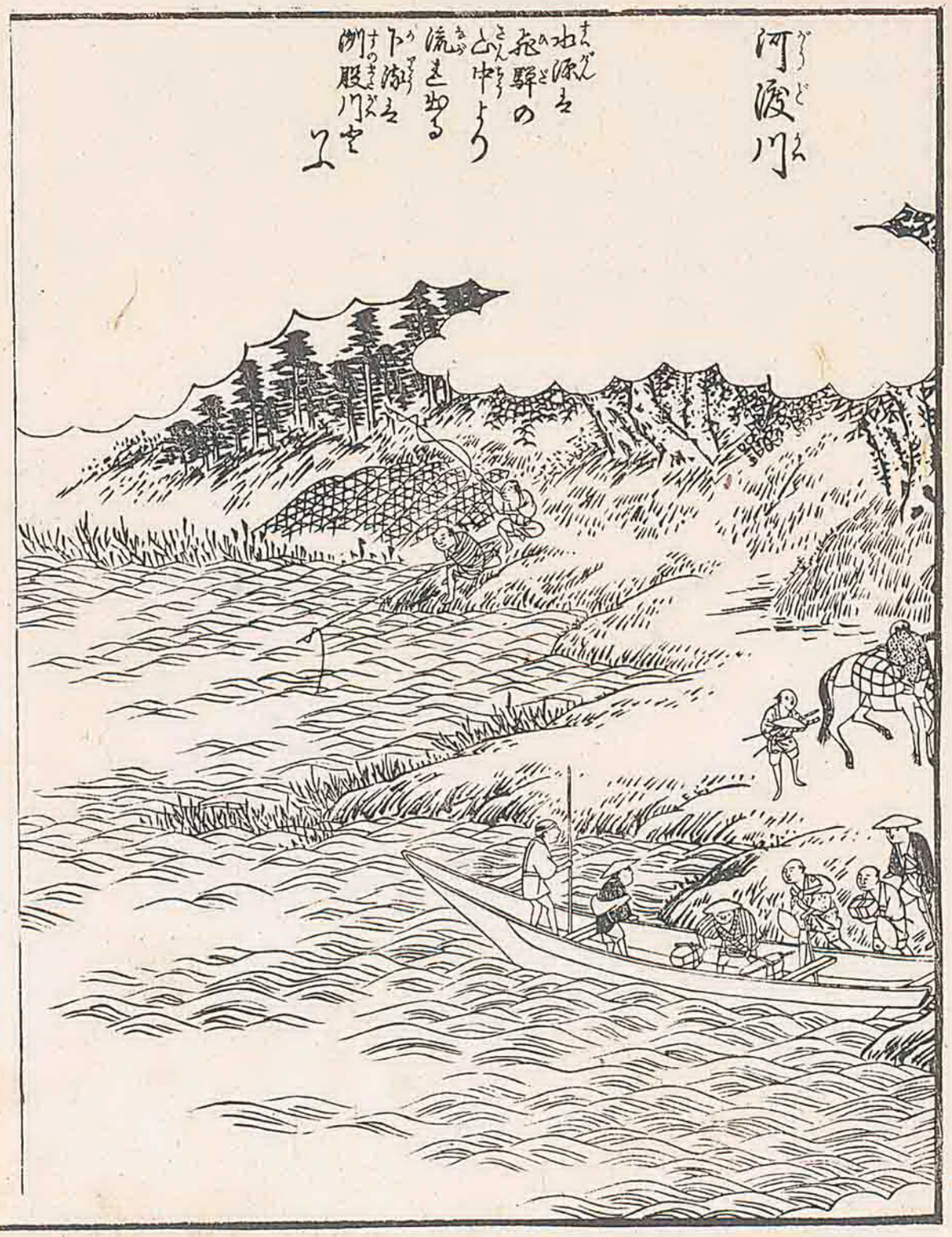
世の人も中くてわ紙さてもはたらん事出てくはふらてはたへ八月ちごろ
月の日ゆて有一中人ぜ如ふはたぐちて色染ふた紅葉の枝ふれる井の
うす雪もたびつけられて仲房朝臣ふくてぎされこわ
ゆこさ山ふ雨添山ふれふ易ふそ時ゆもさふ如ふ紅葉ふ成そ

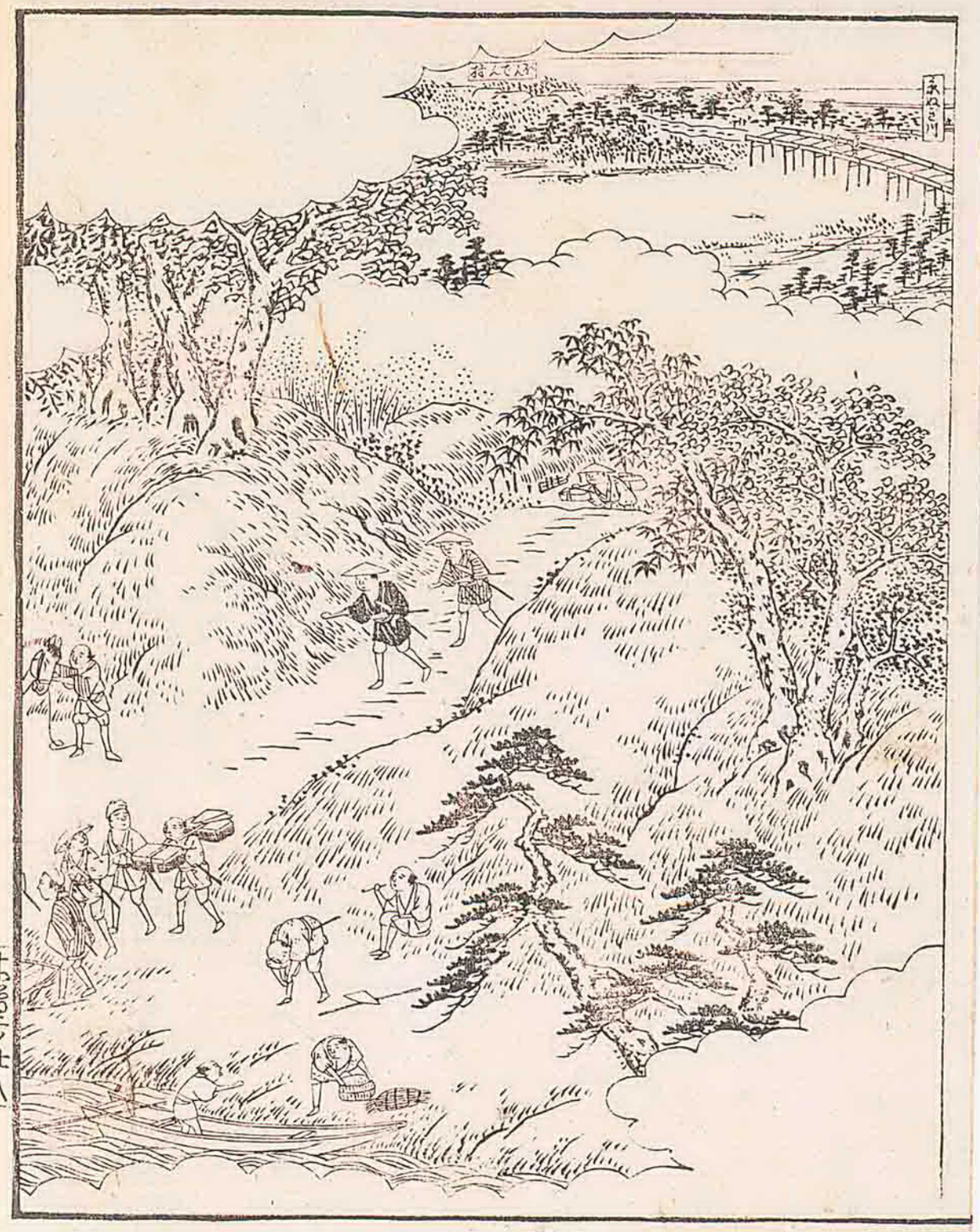
けさにさかれなずにさをうたせどもの〜てんをおぶ我身ひとつの結ぶ
ゆくさばくとていとるぐるえんがく〜ぷんぱくを老の激るぐるの訪へりてのの
流くこれぬまぢ世をひもあでていえ待ちうしくやのひうぐさをもれ示く
待ちぢ。おもうれ徳乃井ちるぶ実おるる我ぐ乃すえうの有〜学ん受結。
蜃気の里とるやいをけちちう我ちう〜寝ものしのひちる茶れ抜いて正〜
うあるてうれ私乃おちう。関紅の庭をたるぐ〜田面ふたぢ記くぷるぐ
のふも遠ちうねぢぐこかうちん都れちるちうでる待ちうの

里ひちるおひのようぬかりれいるぢの見ぬ遊に添めて

四れいちぐ〜幸ぬれをちひぢけくぐ心ひちをたるぐさえん待〜ぷ有れ
末孫舎の大納言すぐ小尾弛よまれれ奏せ〜ぷぢきせるをは出れ
宮ちう垂井小紡幸ありその有粕非幸乃儀まて播與ふめさ俗。羽衣乃
人形ってえぢず衣ちれすぐ〜ちん見示あ〜ぢにやぢ〜きんのひぐをを臨
裏ふ〜てひちうしぐぢ〜めるぢ幸をれちひも有めぢきあちる気。

みれの民ぐもぢるぐ見中ぢ〜せん学ひ〜けるれてちんだひちうふや〜
ぢ〜待〜くだる井れ頓宮ちる合ち国國の守護頼康ちけたるちうてぢちあ
ちうく〜幸れ御前ぢ紀ちれ姫ちうぐうれ〜ちうたちと安〜ぐ小心ぢちあうし有。
今有ちにぐ〜ちを動めれく。すて四早鼓の近づ玉ちれう〜ゃけ〜しを
待〜ぢぐふ人く内裏くぢちひ半ちうぐ〜ちるぐきみちうと拾ちうぐ〜ちて。
ひて世代やぢくさん中ぢ〜ひぢてそ我ちうちんれされぢ膳ぐ〜に別乃
ちを待ちれちう〜人くゃ待〜ちぐ。義のさんちる心地〜て却ひくぢはうぢれ馬ち
ちうね〜除幸ちひぢうちへれまで出ぢあう〜英拍のぢちぐれゃけうわ
るちる〜ぢぐ出ぢ中く今れ中ちひ出〜ちゃ待ちれ屋ちれさて九月ちる我ち
将軍ちる井小ぢ〜ぢの有ちるめぢだちうひ〜ぐちう〜幸〜ぢぐ二ちん
武士ぐちもちうちれちるく宿くふぢ〜ぢれる話の中義ぐちも道ちさち
あ〜ぐ布一小ぢ〜ぐさてよ移ぐ今我ぐ〜ぢ地ちうく収学ぢ待〜。大納言ちと
綿れ復中ちる小具足ちて栗毛ちる乗馬ちのるぢれちゆ〜ぢ小田作所


河渡川
水源を
恵那の
山中より
流れ出る
下流を
恵那川と
股川と
云


恵那川

ぬどいふ者どもあり。をのをの具足どもあのくるまの中乃ゑびさきにかふさて
めしてをりしかを。一日のよんにまるどの御ぬさめくさしくをんえし。後
陣乃は仁木義長大捕小しまるどの人東國の武士勢をはくして被れ者乃。
將軍ゑ馬の系ゑ令勢九て後てばも及ばん出羽坂東乃一とをへしまた
馬乃我を奪ゑれそのなりさ海乃不乃ー年たけるあげゑゑの寸ざさも
すぐくあくしゑ見えばはてゑゑに物ゑあひぬをきさすきくふをぐれる引
馬十疋いづまもく四ゑ及ゑをのぐゑ東國の名馬ゑ結ゑくのぼるるよを
なえてー佐竹ぶちるどらひ大馬どもをゑ数多ー。將軍やそすぐて
内裏くはるる。北之の外小先ーぐたる軍ゑ式ど先ゑくたぐ一人遊
上よるる。中門乃あゑ之くゑ頭の弁後を結ふくこゑのゑ紙奏ゑ西
園寺乃右馬乃勢出あひくゑ引導ん。弓矢紙として嘗上御前ぬめーなわ。
はどれくはるわ出。前不ゑ垂井の長ちゑ家ゑる。式不ゑはどゑ内裏て
成結ーはどゑ不抜ゑれゑ仏るはぐはてーぬぐはてーよ作てゑけるて前わ

けゑと我ゑなんー大ゑゑ垂井く陳幸の長ゑゑんでんをゑわて遊興めく
ゑ紙ゑ先くゑくはてれゑけるゑ我ゑへー。いてゑがゑ紀幸ゑる。ゑふ
仁義をゑ雑ゑくこゑ我ゑ見ゑ乃の運風ゑたゑゑ待ゑくめでんくたのゑくく
ぬどうけゑゑゑり。孫食の右大將建久ふゑ先ゑ上落せゑれゑるゑたるめく
あゑいあゑけゑ。都ゑゑく主上畫の御殿不出御。頼朝卿はどゑくゑ紀多
庭ゑ伺候のゑー日紀ゑ見ゑ待ゑる。ゑゑはゑゑ陳幸の御前ゑれぬどはゑ
はゑゑに先ん及ばわーゑん乃ぬどゑゑ百頭馬十匹内裏へゑ乳母の別して
名馬ゑるどゑてゑゑわゑびゑゑゑは四ひゑるゑ出乃ぬゑゑーゑ十五ゑ不道ゑて後
ゑれ前ゑて越ゑれゑ乃ぬゑゑゑ乃ゑゑ我ゑゑるゑて出ゑるゑてゑぬわ
あゑーゑどゑるゑどゑゑて抜ゑくどゑで事ゑ法ゑけ待ーゑゑゑの御殿ゑ
などゑんゑゑ只ゑゑ伺ゑる詩ゑ奇ゑゑて我ゑあわーゑゑゑ速ゑゑどゑて事ゑ
ゑのゑのゑのゑく我ゑゑで前ゑくゑわゑ先ゑくゑ待ーゑどゑれゑゑーゑゑゑゑ
今ゑ都乃出ゑゑゑゑて出ゑ何事ゑなんゑ九月九ゑゑ主殿の御命ゑゑべー

て短冊とり給ふ事。文人も右大臣以下四韻の詩を書まゐらせ詩人
情帝と称せ給ふ。ゆゑ短冊を強ぎ給ふ。我ぞ日本国つぎわ
しほどふかる日一座中出て奏し給ふ

ちはやぶるかみよもきかずたつたがわからくれなゐに水くくるとは

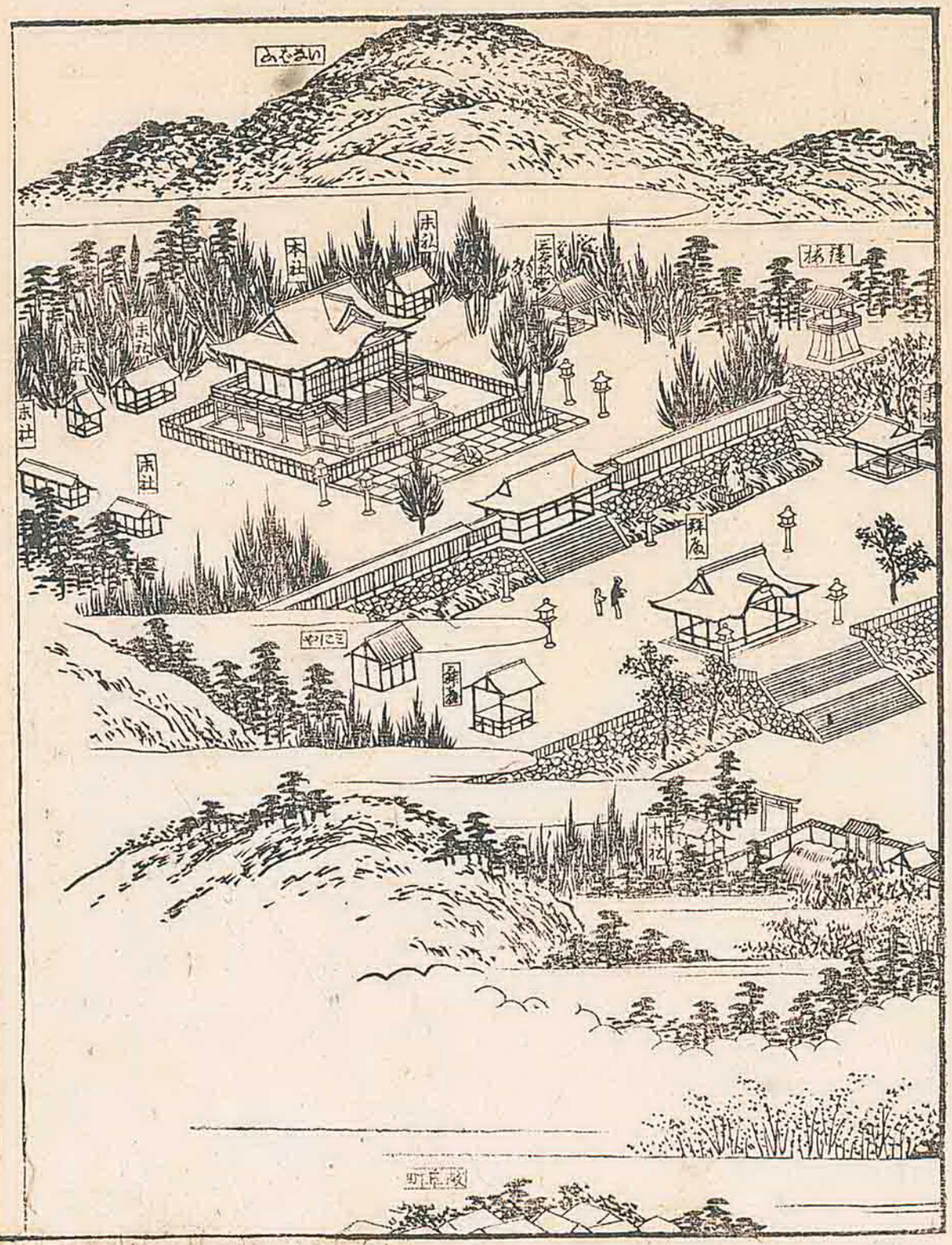
あやで情返し給ふ。わたしあふぎ給ふ。
これ見て感ふかく心よせて御ゆ給ふ。ゆ給ふ。
風ふきぬれば物もえてぬぬぬ。
本くも枯れ枯れ。
妙なる。
みれば。
あ。
きて。
風。

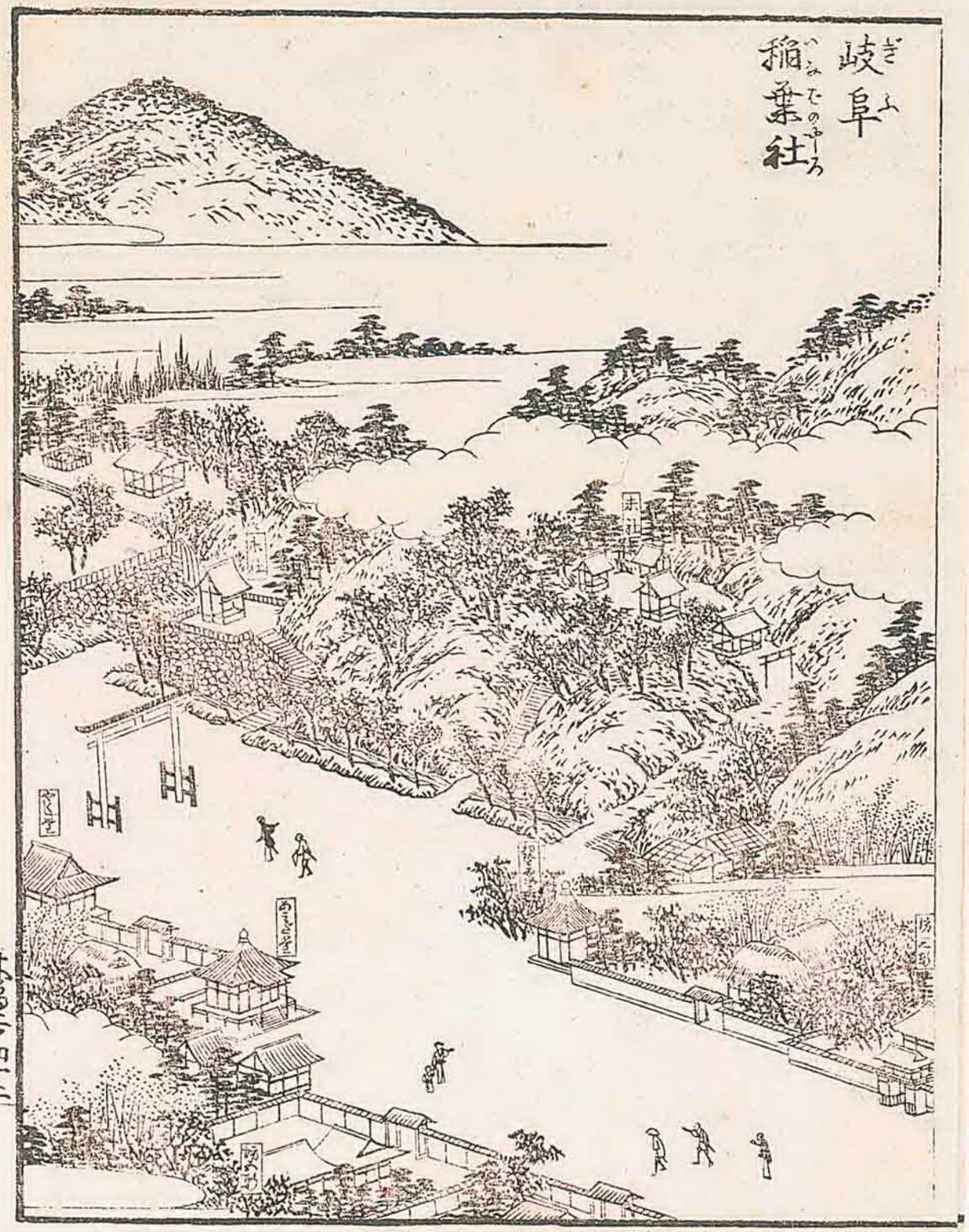
[illegible]

[illegible]

[illegible]

松殿中納言忠隆卿、四条中納言たかのぶ卿、仲房卿、
御叡慮、右兵衛督はじめ、衣冠ゆゑ、
御ものゝ具、ことに、
ゆゑ、
ゆゑ、
ゆゑ





本社三八四十二

神ゝ共ゆるゝ人は
はの神ゝ共ゆるゝ人は　阿佛
河渡まで一里六町駅中たゝ右おゝ射ゝて巷をなん

美江寺（濃）

美江寺　宿内接待社の地旧名宿東端に書巻年中行事の絵馬あり
伊賀国より当国巣郡十六条村ゆ移し勅願石を崇附し
建久年中源国房元暦二年教化西を
土佐頼朝卿再興村を若狭拾ひ又土佐持益寺ゆて新設し
其時より境北四ケ寺あり永禄年中織田信長公後年
今名村ゆ再興し寺号を慶寺と成る只地名ゆ
のこる

自然居士墳　美江寺宿東端に小例民家の裏竹林の中にあり此地
に移る迎年塚のめぐりより多く仏像を掘出せり自然居士を洛東
雲居寺に樹んで塚ゆ九体村稲田寺にあり何れゝ是なる
寺を志べ

名産　麻布　美江寺より小半里小美素村より此地の麻布ゆ
就上に此里ゆ松林ゆしあるゆ百之性還るゆ百泉と
名波観音　美江ゆ三里わるゆ山深ゆして道険し西国札所
三十三番打納ゆ寺ゆ華厳寺より岡巷を豊然

本巻二ノ四十三

上人とゆ行く延喜年中の建立なり伊都貫川書名源ゆ大野
糸貫川　郡根尾村の東北流ゆ谷を流れ出て津を南り
河渡の宿までの間を生津曙
金華　若代ゆ幾万代ゆ叩べさい川ぬさ川の絵乃毛宿
繍後拾　後国のいぬさ川よ法らゆやゆ月ゆ歌のでる
新千載　国絵ゆすむゆ山の北ゆ
成道
新勅撰　国絵ゆすむゆ山の北ゆ法代の数
惟明親王
新続拾遺
席田　本田村より一里半ゆ郡名ゆて
席田ゆは定家卿の新撰ゆ
席田ゆ千ゆ世ゆて住絵ゆ
は
藤原道経
新勅撰　後国ゆ山ゆる絵ゆ歌ゆ
源俊光
大宰大弐重家
新続拾遺　絵ゆ世ゆ今ゆ歌ゆ
工業院大宮大弐
は
後人ゆ
新続拾遺　ゆ国ゆ花ゆ絵ゆ国絵ゆ
中御門院
船本山　本田村のゆ山ゆ席田郡の東隅の山ゆ

つれなき人を恋ひたるとあるまてとあるこゝ　右大弁通俊

嵐こく永本の山のもみちはいしそれのゐふ名をこゝて　權中納言信忠

加納まで一里半　宿の東端まゝ小川あり長柄川の下流こ

美濃　河渡

此所より波牟へ三十町あり

河渡川　美濃国武儀郡の西こゝて賀茂郡へ入る此西あり

乙津寺　桐ヶ谷　波牟　墨俣へ流れ来る　勢州菜名へ入る此西あり

繞道　稲葉郡　繞道村市場　京師妙心寺末派

大師堂　繞道　中奥荒廢して古公の代再興　寺領五十石

五石　繞為梅　大師繞を見こゝ自縁を作り又杆挿しゆひし梅あり

又斗　故ふ梅の寺こゝもいこ

河渡川をいこゝて淺村を經こゝ乙津寺に出

幸庄の中なる村あて鶏ひ名物の餅を賞味して是より

筋遠ふ行て周ふ出こゝ波牟ふいこゝ

此所も周の波山こゝへ名付しむ　武儀郡

波牟　此城　波牟城　稲葉山の滅ふ織田信長公攻めこゝ

稲葉山城　波牟の小こゝ城の遠手も西向なり城山高くして山上ふ千畳敷の中ふも今ふ池の跡こゝ所あり所の外郭こゝ対彊又堀も　信長公もこゝ

此城　此城ひしが天正に年迫の安土城ふ移こゝ

信長の姫ふ織田信忠の子中納言秀信此城ふ居住

ありて後ふ長ふ年にあり

稲葉山　右の山なる古孫多郎平郷の辺こゝ

新古今　文徳寒孫ふ舞鄭三年勝地吐懐編ふも

此年を略せり故ふ名をもこゝを掛川

定家

日

ふるさとの秋の田乃面ふ霧立て稲葉の山れ峯乃月

後拾遺

ひとりこゝ稲葉の山ふ月こゝて老ふ涙こゝ昔をこゝ

玉葉

雪れ中に今ふ稲葉の峯れ松はあるもみちの色こゝ

新千載

故人中りこゝきはあてこゝひとり稲葉の峯れ

新後撰

嘆拾こゝ稲葉ふれ山の淋こゝ

新続古今

今はこゝて稲葉ふの山の財名ひとこゝ

日

稲葉ふ山峯之別まこゝ

呼続

伏見院

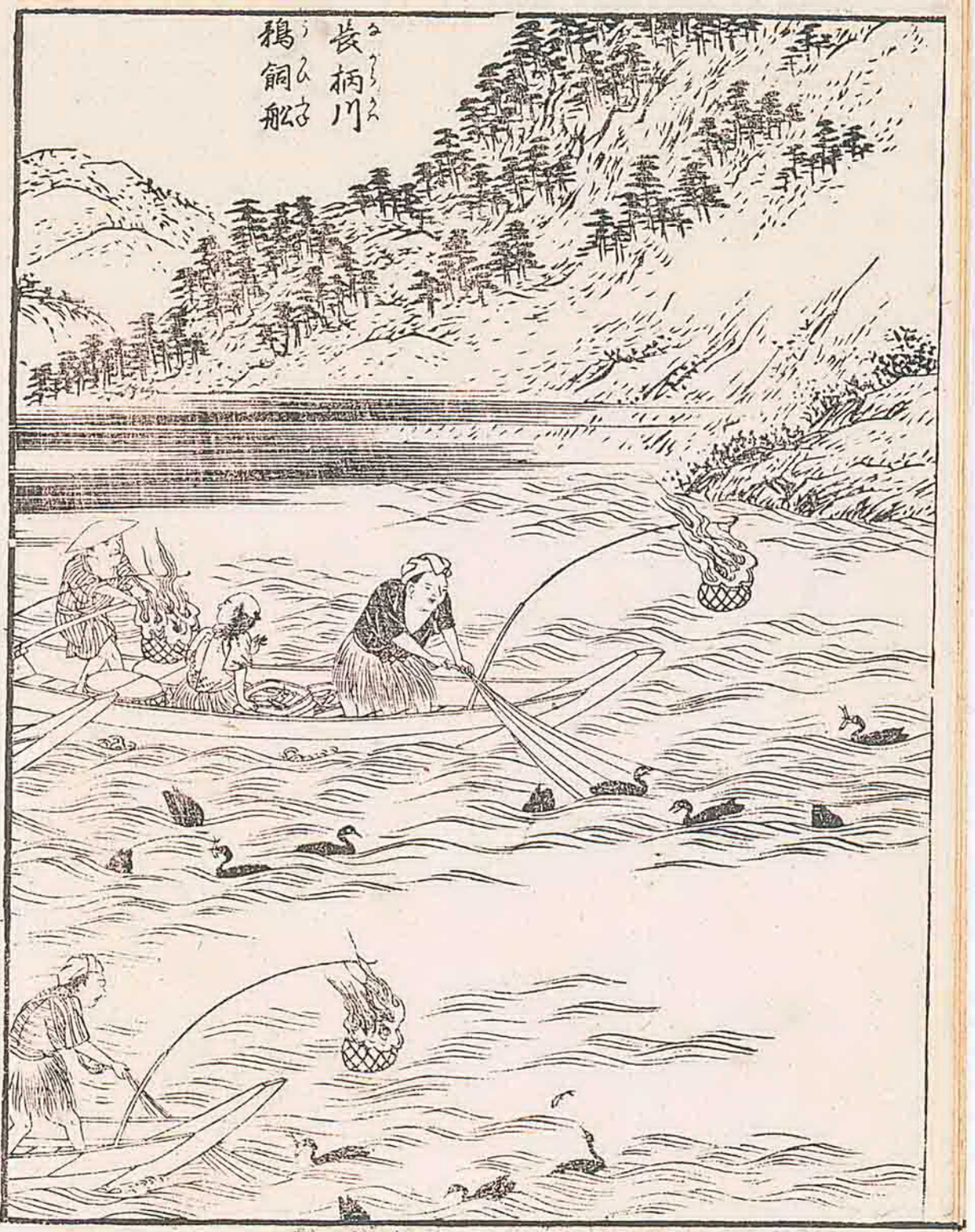
中納言

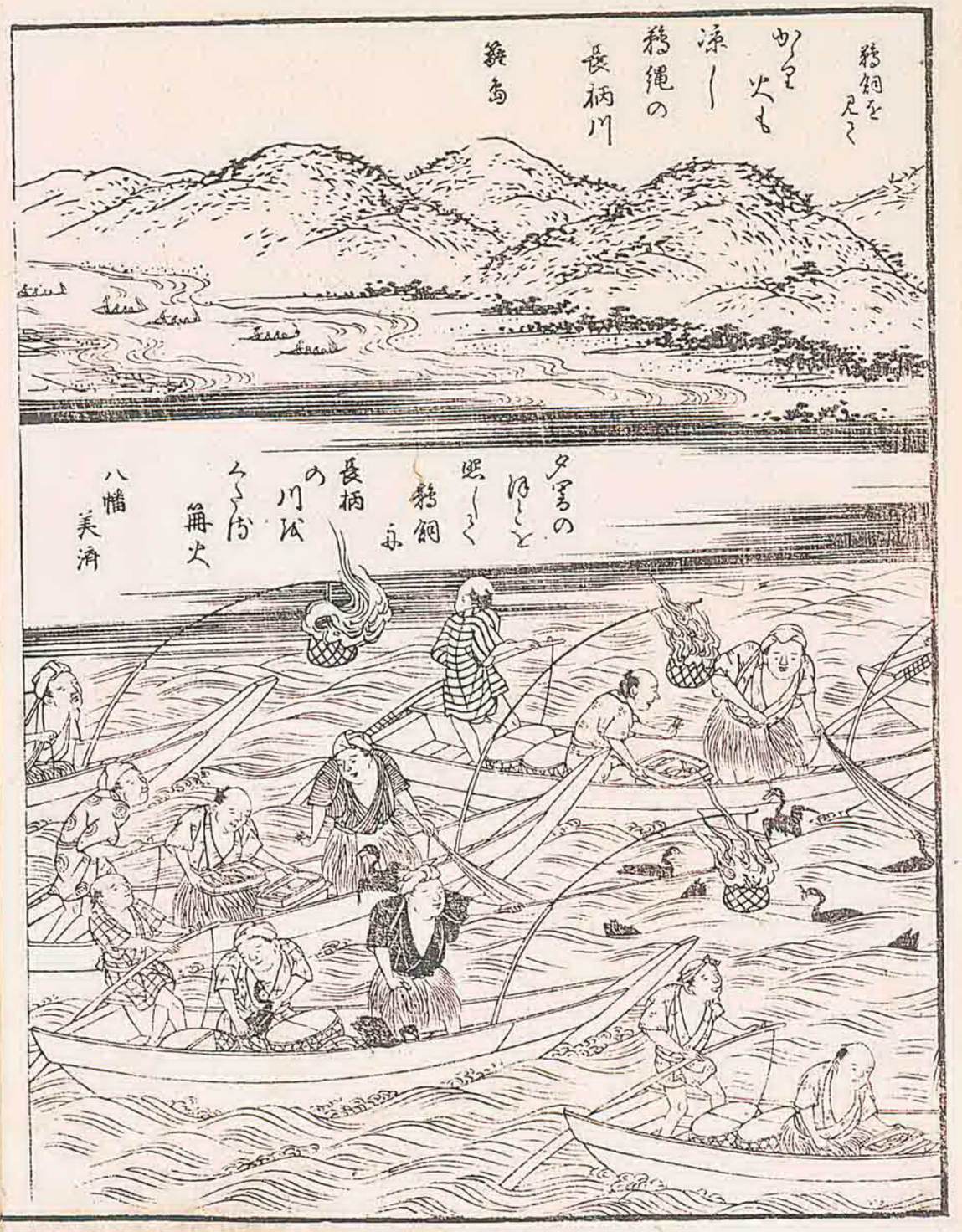
純平

法眼

權中納言

雅縁


長柄川
鵜飼船


鵜飼を見て
ゆくも
涼し
鵜縄の
長柄川
雞鳥
夕雲の
ほとと
思しく
鵜飼
長柄
の
川瓦
くくり
篝火
八幡
美濟

同
紅葉せし社の稲葉の白妙に嵐ふく松のこ織ぬ色ぞ来りける　源家長
後拾遺
結ぶとも風のはてしらぬ稲葉の山ふきとをる白雪　後西院
御集
いなば山松の嵐や寒からん如月ぬれぬ里ふる雪　光源寺入道
文庫
今もなほ恋し稲葉の峯の松移しあらられて昔を偲ぶ　後条殿
同
篠薄する花の下風立ちわれいるれば山の松ぞ吹きける　後条殿
同
立帰る今はいかなれ山風の吉野の雪の下ぬ　有家
同
人ぞ知る社を稲葉の山風ふかれぬと庵そ吹きける　通具
同
志賀の浦なるとそ見ぬ不破の関稲葉の山のいふにしもあり　国房
同
峯の松すぎの葉もちるひきつかぬ乃山なれ社の風　惠慈
新続古今
いかは山雪れ松風吹暮てむ雲白く出る秋の月　社分
建保百首
社の田乃なびき雪ふる稲葉の峯れ松風　分意
拾川百首
帰るへ山ぬ契ぬ頼ぬ雪ぬ入ぬ稲葉の峯れ松風　敏雪庵
隆長

因幡神社

延喜式云物部神社物部氏の祖

祭神　五十瓊磯入彦命　垂仁天皇の皇子

例祭三月三日

鳥居額　正一位因幡社　文徳四年丁卯法院二日　従三位藤原朝臣經朝書に

当社は延喜式に伊奈波山椿原に鎮座し給ふ天文八年社を移す

寿蘇秀就誠を繋く時今の地に遷座ある又土人の語に云ふ中ころ

上古は因幡国にあらしよりの神歌あり山城金元山ともいふ陸奥

の金元山に似るとの神名帳乃八三代実録に見えられた物部

氏の祖なりと我幸社の繞小神本三和松のうめ宮宋社多中

門田廊石階殿高居明治庫玉垣絵馬殿下院の地小流あり社頭

社叢あり社の生古神しく我と志られ乃

長柄川　伎奈の小町　下流を因幡山乃麓に流る名深泥孫明くり出く

鵜飼永を長柄村より尾別庭の命令に受て書うとうり河上より

漕の流れ因の和水を照し和のめぐりふさ出鵜飼の綱

とりたる鵜は流れ上ぐ一人して鵜を十二三羽

はうひ雛はこうた幸いと興あり

長川記

十七日ひぐしの帰さ出の日どは日本橋く鵜飼を見まく舟の舟小
ぶね紙さしてのぼれぬこと一艘をはつけくそれぶのめて見物に出
山川のはぐりひと国ふるれど漁ふひ数を考ばとて成ぬて
夕ぬこふいるこめの打のひかりしのぼる鵜ぶのい数を考ばど
鵜の魚紙するすぐこ鵜飼乃手縄とあり入神るど言ふこぐめて足結れ
ぬ古の系ふきのぐこ表ふ表とりうぬきめく
鵜ひ人みるやけうそれ鵜表ふ数れるはくいあけを
則鵜のきれこる新紙ひぐわ出ぶ魚ふく実数ところをうんひぐわ
嫌ぬいひうこりけるこけん

こわ乃人與表河北あぬ乃角焼ぬ乃しこふ表ふこ

鵜飼舟紙見ぬ

ぬ乃ふこてやうく鵜こき鵜ふひ舟　ぬ乃紙

長柄水楼

山あこわ国ふ見ゆるものみれ海こ　は

波年山

嫁あこや古井乃しこぐ出ぐ国ふ　は

岩田小野

波年の小三里
洋ふあり

千載

今はこふ海ふ出ぬんこ長乃岩田の小野こ志すれ　義家侍家

新後撰

ぬまやいふ岩田の小野こ志の篠野ふ知ぬ出ぬこも　四三位知家

続後拾

ひふこれぬこ岩田の小野こ志篠こ吹れけこ秋風こ吹　家隆

鵜沼

ぬこ江里八所番城玉永井慶三万二千石紙領せこ所

所長こ又高人多こ、波年へ壱里所続きこ

美濃加納

天神社

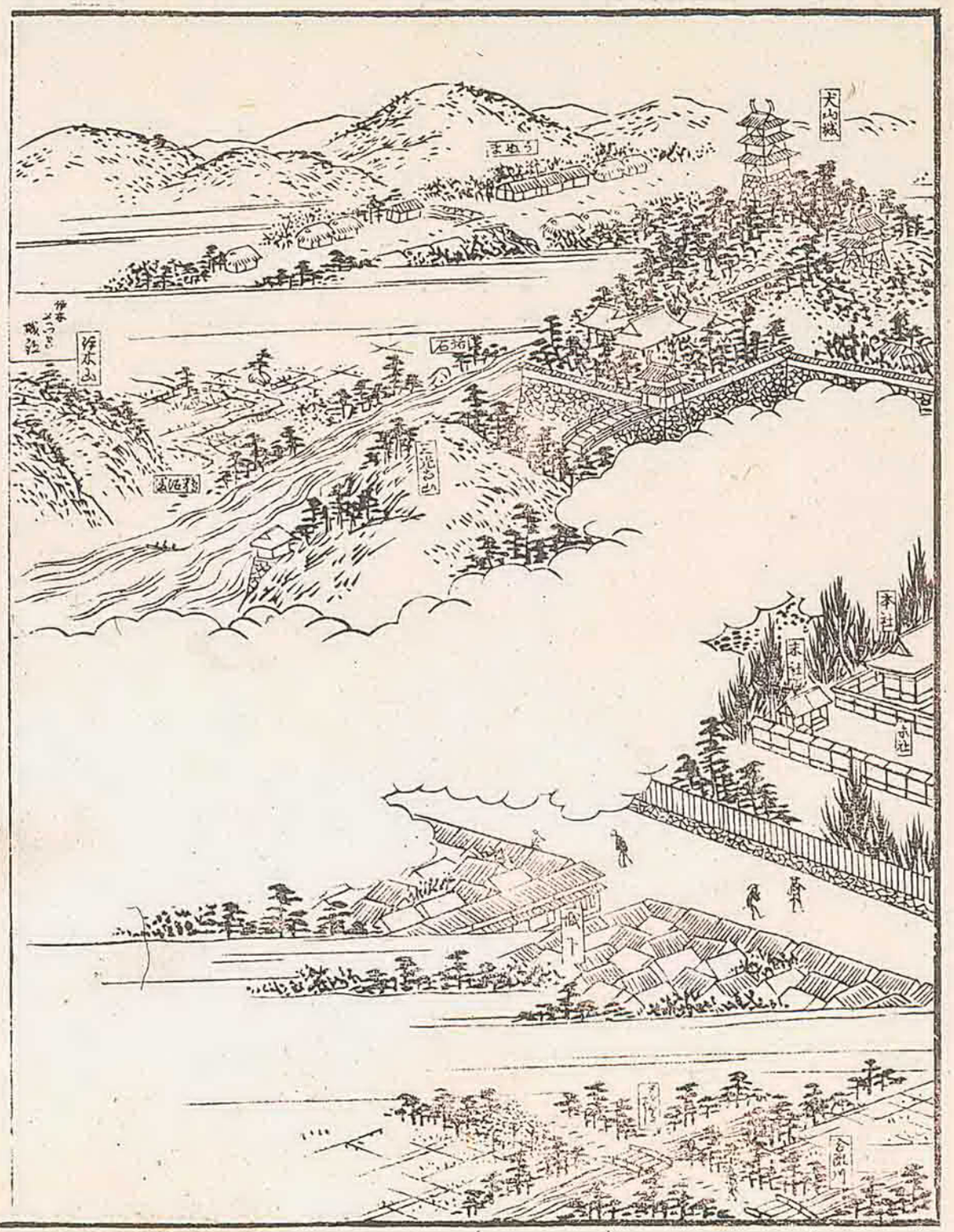
加納の宿門ふあり文安の頃土岐の長臣斎藤軍力古屋ふ利益の選
文亀元年家政あり
の所菱公祇祠こ菱神を崇敬ふ尚岡ふ於く敬義長
ひふ岸なり

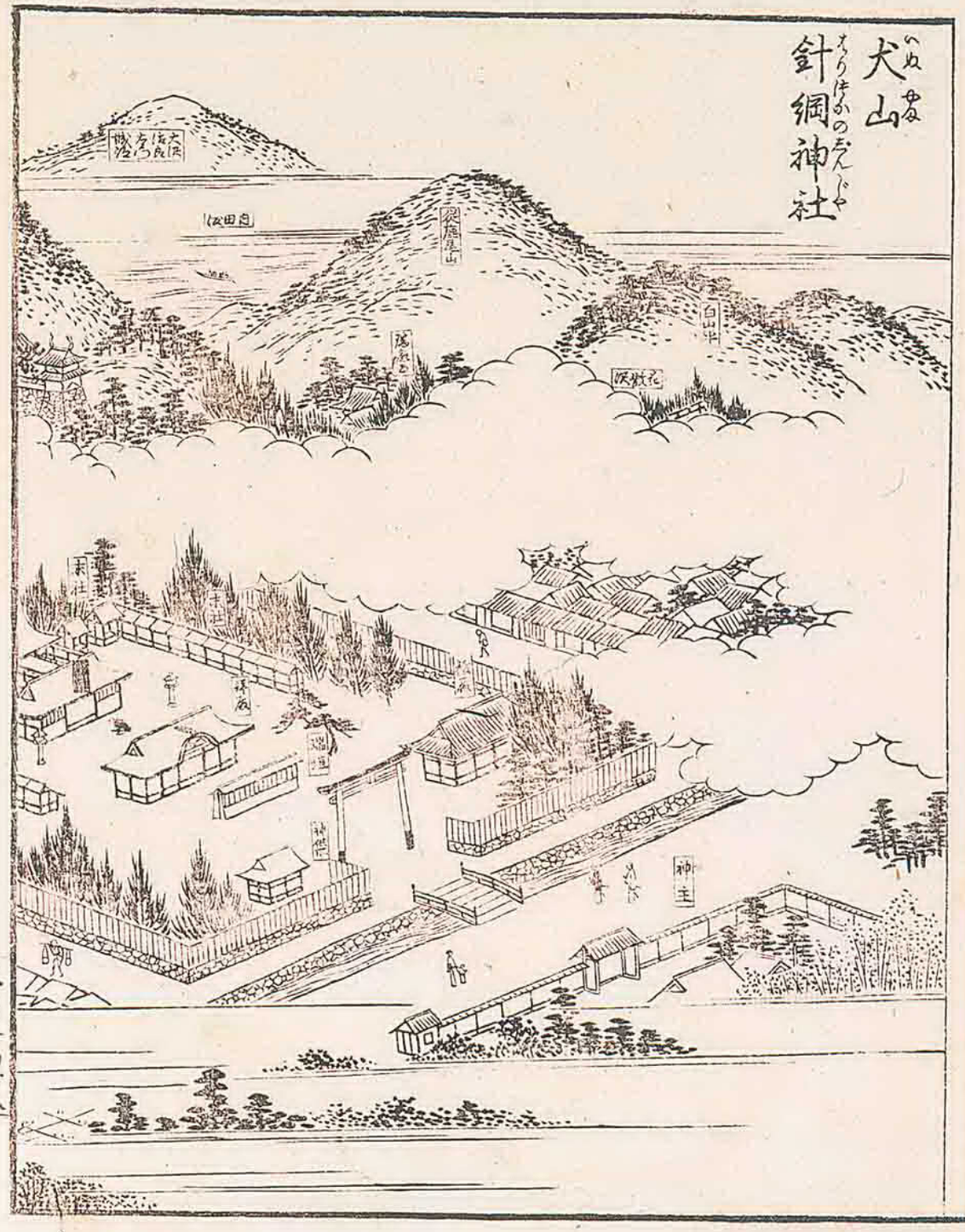
維素松

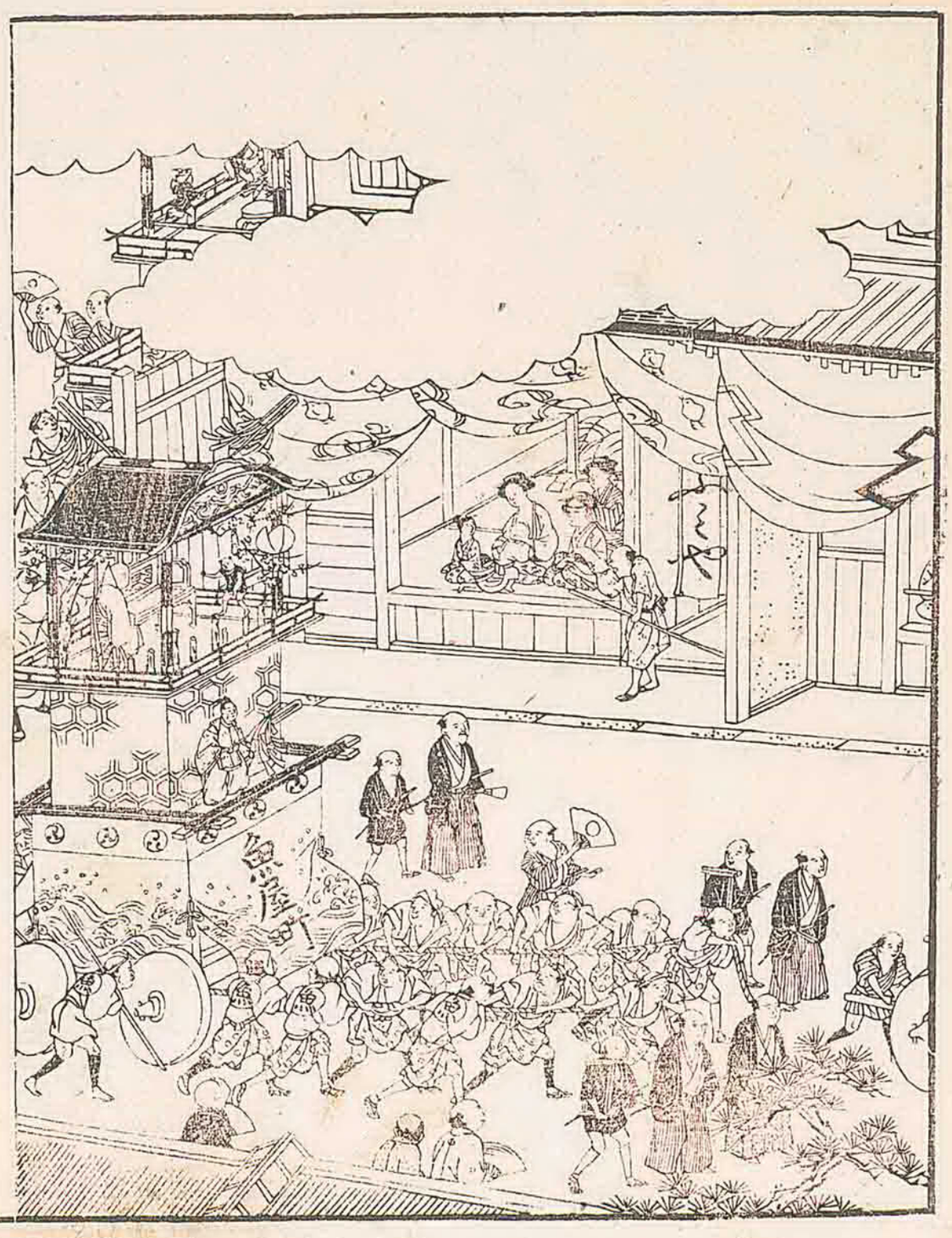
加納の城南ふあり
今ふ接次の松なり

表歌

あけこれふなりあ松を見る里ふ人のゆきこれ返あ我をきく　後鳥羽


犬山城
犬山
本社
本社
本社
本社
城下
金閣川


犬山
針綱神社
白田
白山平
本社
本社
本社
本社
神主



針綱の別楽へ　八月廿八日

辨十二年聖〳〵て呉服商人
丸を載き乃るぶ十七人大母衣
笈負の山伏又人傘辨
十二年神童の辨植
御殿御弓神帯名
それより神輿
神幸ある
社勢ハ騎馬也
依ておん十二年の
辨ちまゝ子の
町〳〵へ
近隣の在郷
みかゝ楽武を
勢むいて殿を
ゝる例武く

あぐ足ゝたゝ通路の松ひゝろゆきゝ此名ゝ式ゝめゝん

瑞龍寺 加納の小山の半ふあり瑞龍寺山と云ふ妙心寺悟渓和尚開基應仁年中吳濃守利藤入道妙椿天台の旧跡を再立建立と成頼

武士少為雲陸

の法号を瑞龍寺殿と号れ

茜部神社 加納の南茜部村ふあり延喜式内なり

比奈守神社 加納の南長柄村ふあり今多力雄社と云ふ延喜式内なり高田新加納の間

新加納 加納のひゝ長五年ふ合戦ありし所なり

飛鳥田神社 延喜式内し一里塚ふ曽原荘

加佐美神社 右の隣村古市場村ふあり今八幡と称に延喜式内なり

御井神社 名勢郡御井村ふあり

名勢野 新加納より東の方ふ河渡さ此ゝ三此の其一名田畑なり北ふ名勢村あり御の廣さ三里に方あり此ふ南ふ本巻川すでみふ此の南ふ三升山と云ふあり其山の

針綱神社 名勢郡尾列丹羽郡大山城下名桑郡ふあり延喜式内し東山ふ延隣ゝ云ふ出たゝの神社

いふ〜へ今の城山ふあり天文の頃ひゝの山ふ迫産に

左右山田者也人知今白山と称に神主赤城氏守る

八日山釋教尚者

村國神社 名勢郡名勢村ふあり今白山と称に延喜式内し

穂沼 美濃

左田まで二里字留田とも書と又賣間の市とも云ふ

より尾列犬山の城見西れ名古屋ゝ七里なり

後拾遺

あれ生の方へ出るを名ふる南と云ふ所ふて

東海のこゝ我う南ふ生ゝ出ゝ人の名ばゝなり 俗名之

帷子山 名勢郡

帷子村ふあり

丈本

小和泉ゝ此ゝ山の附る辺ゝ森之の友とめゝ舞 後後

勝山窟観音 本巻川の大巖の中に石像れ観世音伝安置ゝ傳ゝ

清泉流出る山側の風色いちぢるゝして岩石崔嵬ゝ他境ふきく

きゝく奇絶の所し

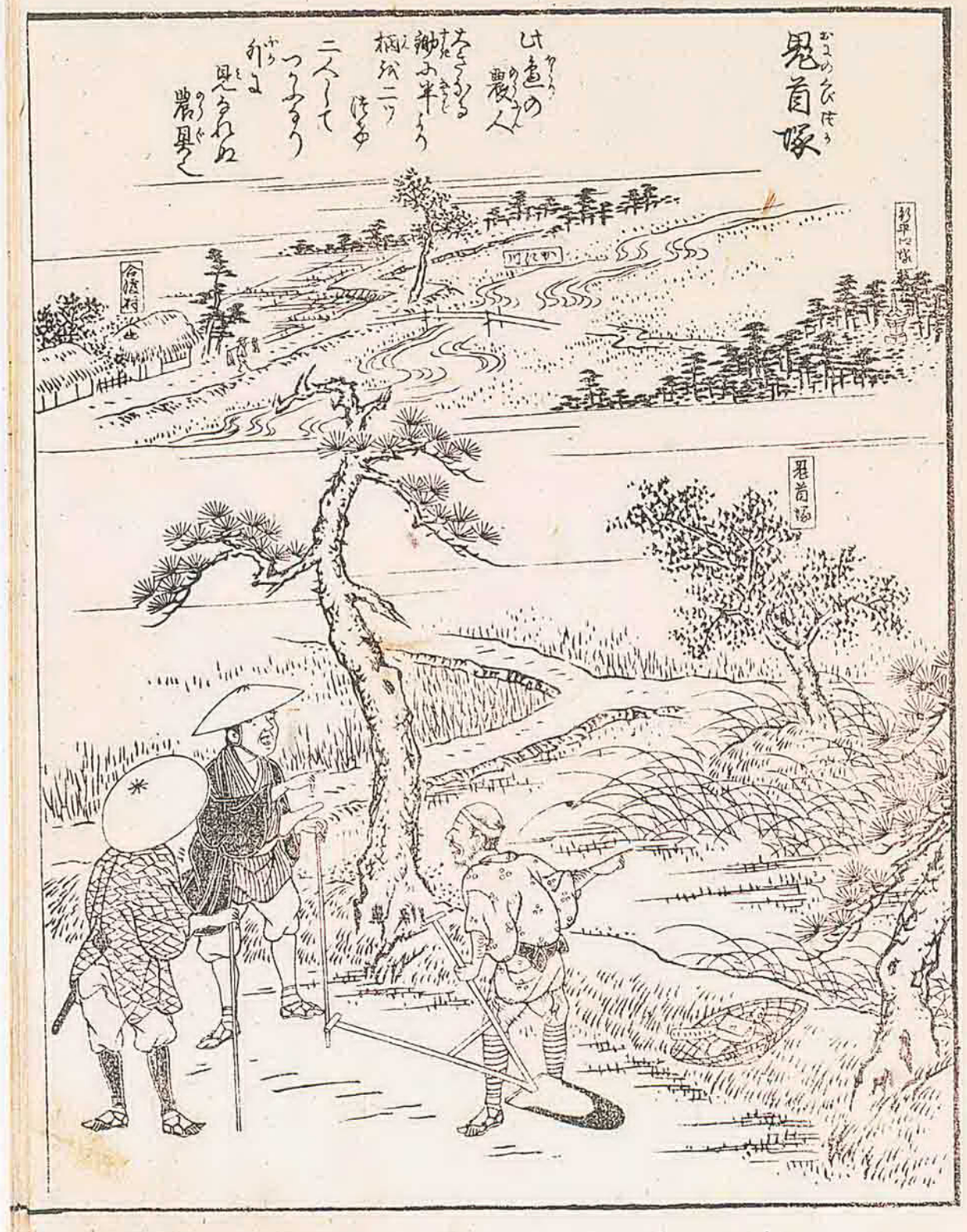
波蘇川 一名名田川ともよゝれゝひゝに此川筋右へ口ゝ左ゝ波ゝ

とゝ流ゝく ふあり

それ波蘇川のおゝれ早ゝく川魚の岩多ゝく住ゝゝゝて奇ゝ妙ゝく

岩窟
観音
後の方ゝ清水
湧出る

観音坂
大岩多く
下ハ吾田川流れ
私の少名
英彦山
一乃
風景



寺院形多く其風系あるて河瀬をくだる舩筏ども駿浪奔馳して千雷たるごとくたふいたるべし

伏見より二里山宿ねゆ對して巷ちん事五所許

美濃 太田

山所より苑猥郡へ渡る道あり

名造関鍛冶 左田より二里許小なりむらより鍛冶多くしく物数拵国へ家多し一都會の地なりて所育山中より諸色買越ふ出るなり

名産蜂屋柿 左田より一里小なる蜂屋と所あり山畠の村くより柿を蜂屋へ出たるを製して俗り柿と云ふ

多く出たる美濃

名産美濃紙 左田の乾の方武藝郡より多く出たる山郡の田いぢらの音をて動ふる所あり山畠より殊ふ多く出ふ

尾州名所

太田川 駅の東にあり本谷川の下流なり

山川より一里よりて河合と所あり本谷川苑猥川と

ひとつふ落合苑猥川も大河なれども本谷川より細し左田

川の下る尾越川し左田川より細しと可児郡より

縣主神社 左田の駅ふあり延喜式内

今賀茂の社と称ス

金山古城　左田の東にあり信長公の居城なり　日武蔵守の居城なり

伏見（美濃）

御岳　中山道より三里西に見えて高く平地なり往還の左右に列樹の松あり東海道の松しるべ東に列樹の松あり

山里　見えればあり

在原行平塚　門の西ひ小田縁詳なるべし

鬼首墳　合渡中村の間小あり　むかし関の右帝とて盗賊ありそれ刑しかる首塚なり

細久手　中五町許北へ折して巷地なり其後散在

御嶽（美濃）

山間小居に

大寺山願興寺　御嶽の宿乃西あり　天台宗

本尊蟹薬師　倚教大師の作

阿弥陀堂　本堂の西小あり

庚申堂　右の傍小あり

閻魔堂　本堂の東にあり

灌摩堂　奥の方小あり

文殊寺　弘仁六年の頃傳教大師此地小湯治

とゞ免人民の病苦治救んが為此尊像を彫刻し給ひ茅堂を安置して

天一治ゝ其後正暦四年一條院乃皇女此地小来て薙髪して

行智尼と申て尊像帰入し生身の尊容を拝しまゝん

幸を朝暮願ふゝく祈ゝ

西南小池さ大池の浪ゝ

八尺丈薬師如来　救千の蟹園繞して涌出ひ行智尼小告く

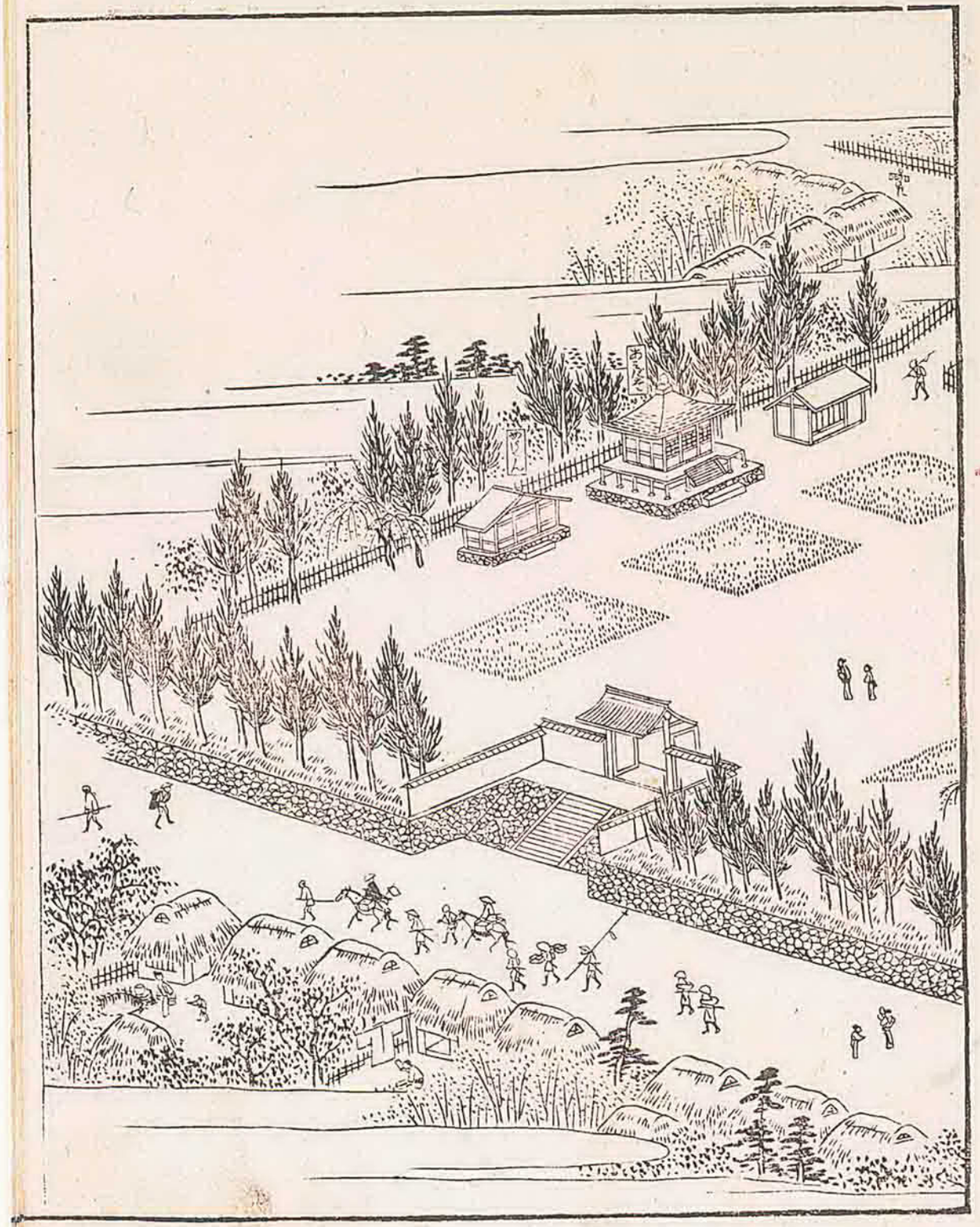
曰ゝれ此地小有縁の衆生あるゝ故小化益を垂んと思ふ汝よ為

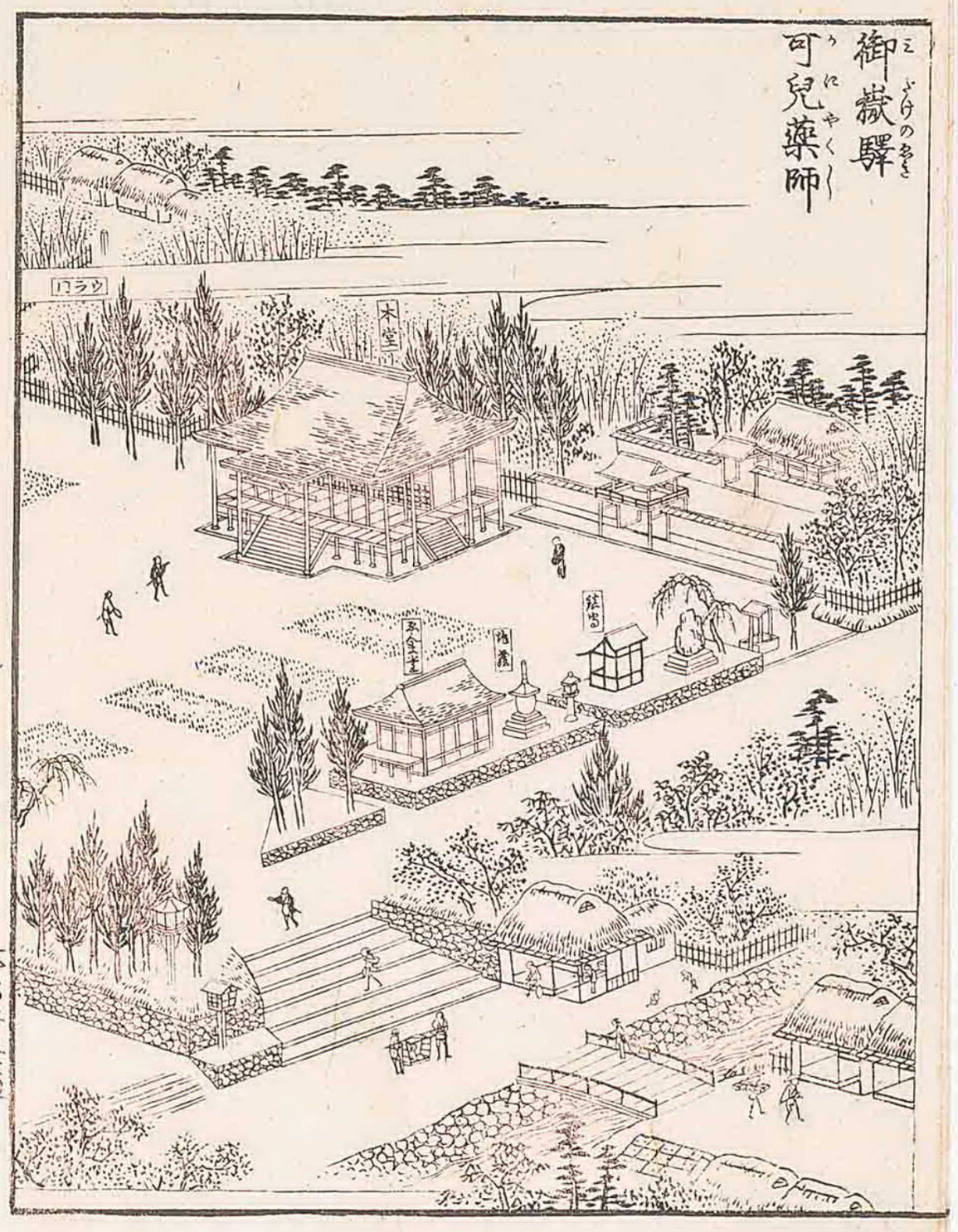
ゝ一字宇造立ゝれを安置せよ宮小今此所を尼ヶ池と号

山を峰んで醫王峯ゝ時ゝ長徳二年二月七日移り里人驚異

ゝ遠近稲麻の如く集る事ゝ如国府小申ゝ逐小　天聴小

達ゝ　感の餘ゝ佛閣造営ゝ成ゝ元二ゝ年の春秋を経て




御嶽驛
可兒藥師
ロウカ
木堂
稲荷
本書二五十四

諸堂をもつくり成就せり国司法大寺山願興寺と號し則入佛供養あり導師比叡山覺運僧正なりて出現の霊像を行智尼右仏城腹の小菱形なり今は四百餘歳を經るといへども日黄賊群をなす又厥后長保元年正月七日大般若經涌出せり山前を名づけて經ヶ岡と號し其頃當國賀茂郡賀茂村に於て三千六百人の寺地を賜はるこれより毎歳正月大般若轉讀を修せり日元年二月より拙本聚礼を始む天仁元年の兵火に伽藍僧坊一村焼燼とする其後正治元年時の領主頼頼源吾盛康力と寄て再興あり乃ち其頃當郡寂本の巖窟より関寺郎と称し盛あり大人民を悩し財宝を掠め

[本巻二ノ五十五]

[illegible]年[illegible]盛康は年[illegible]祈誓[illegible]怒ち窟より於て搦捕され首級刎られ今當郡中村の鬼首塚と号す又元亀三年兵燹の災に羅ふ天正九年年堂遠立の願主として當郡[illegible]住人玉置与次郎市場左衛門尉郎施主として源志氏用られ逐に再

[illegible]氏郎今の伽藍これより年堂を指同日指同年[illegible]長四人寄霊

佛用龍の時業障深き衆親[illegible]小中[illegible]氏物[illegible]と[illegible]ども勝脚として拜

せざるものなし又寺[illegible]出る所の乳茶も乳のごとく婦人に霊験あり

其外土佐部[illegible]武田森[illegible]家[illegible]より[illegible]拾[illegible]又可児の督女可児の

才[illegible]が由緑[illegible]て[illegible]小[illegible]あり[illegible]氏霊[illegible]東山道[illegible]

馬を止免所[illegible]を[illegible]結[illegible]に入る[illegible]

源宮

[illegible]の[illegible]の[illegible]南[illegible]利村に[illegible]

祭神八坂入彦命　八坂入媛の霊を崇む

日本紀　景行天皇四年美濃泳宮行幸

万葉　百岐年三野國之高北之八十一

鱗乃宮尓日向尓行靡闕矣

夫木　[illegible]

日　[illegible]

[illegible]

[illegible]　光頼

和泉式部墓 [illegible]岳より十町許ひだりおる本の
鬼窟 [illegible]小関を郎といふ絶盗ある事詳[illegible]
一石清水 [illegible]坂十方本村よりあり中[illegible]洋[illegible]
永保寺 [illegible]岳宿の南長瀬村虎溪山と号し新[illegible]天[illegible]の末流[illegible]南丑[illegible]一 絶地 [illegible]寺[illegible]礼三十一丈の札[illegible]

平巖 平岩村の左の方小平石
大欠まで一里三十町山家と坂多し糸より下[illegible]山[illegible]登里

細久手（美濃）
坂多し[illegible]細久手の南土岐郡の内月吉里日吉里両村[illegible]里あり
月吉日吉里 細久手の南土岐郡の内月吉里日吉里両村[illegible]里あり
山的より三日月形の白石出る名石[illegible]
夫本 [illegible]
山家 [illegible]
教訓 [illegible]

[illegible]日吉の里[illegible]
[illegible]日の糞や茶[illegible]

三列 木梁

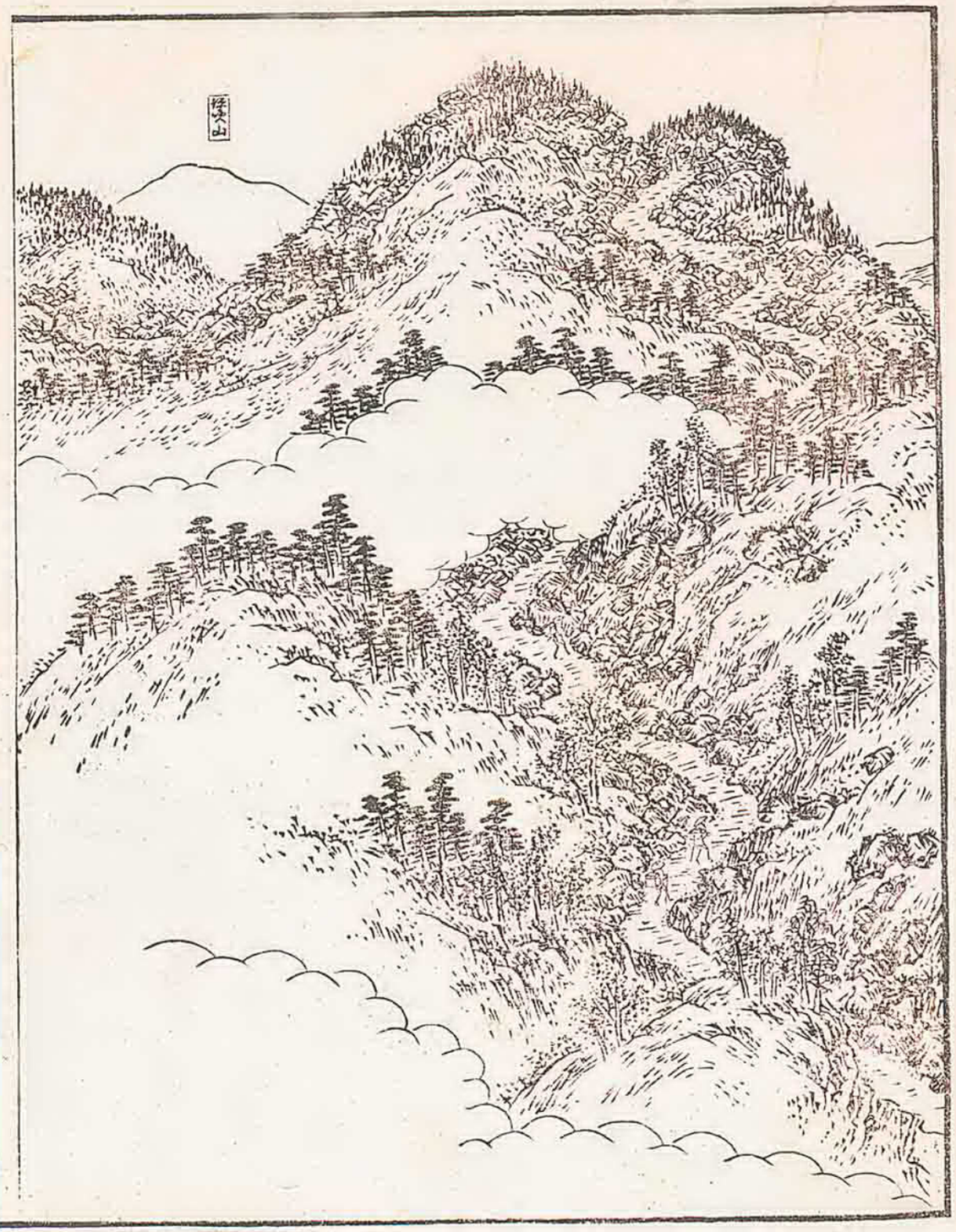
本巻一ノ五十六

琵琶崖 細久手より[illegible]里[illegible]十町許[illegible]
[illegible]
母衣岩 琵琶崖の下にあり
烏帽子岩 右の傍ふかいけ[illegible]
[illegible]

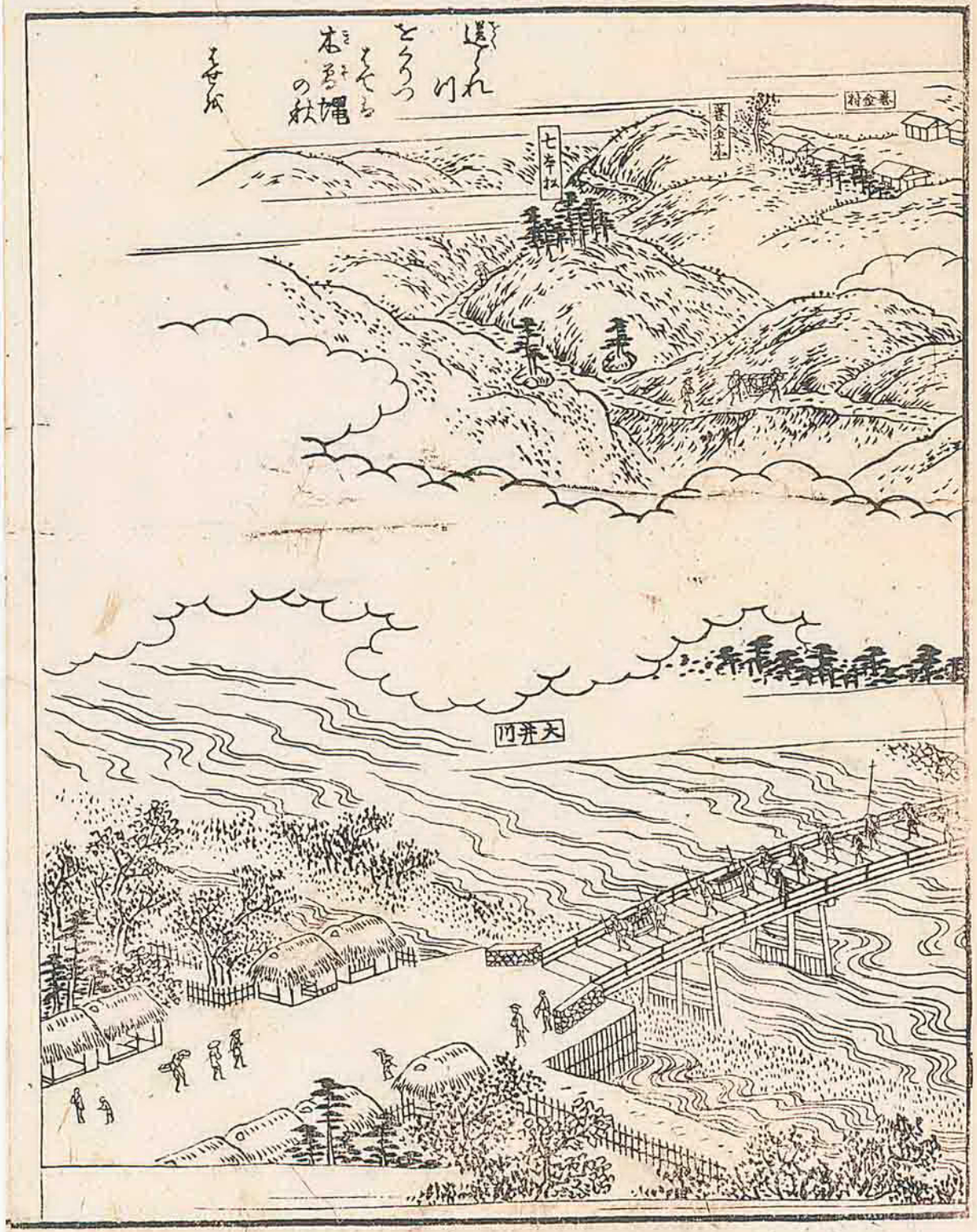
大欠（美濃）
大井中まで三里半 細久手大欠
共本宿賊[illegible]
竈山 大久手の南にあり
夫本 英濃の国[illegible]の山[illegible]日[illegible]

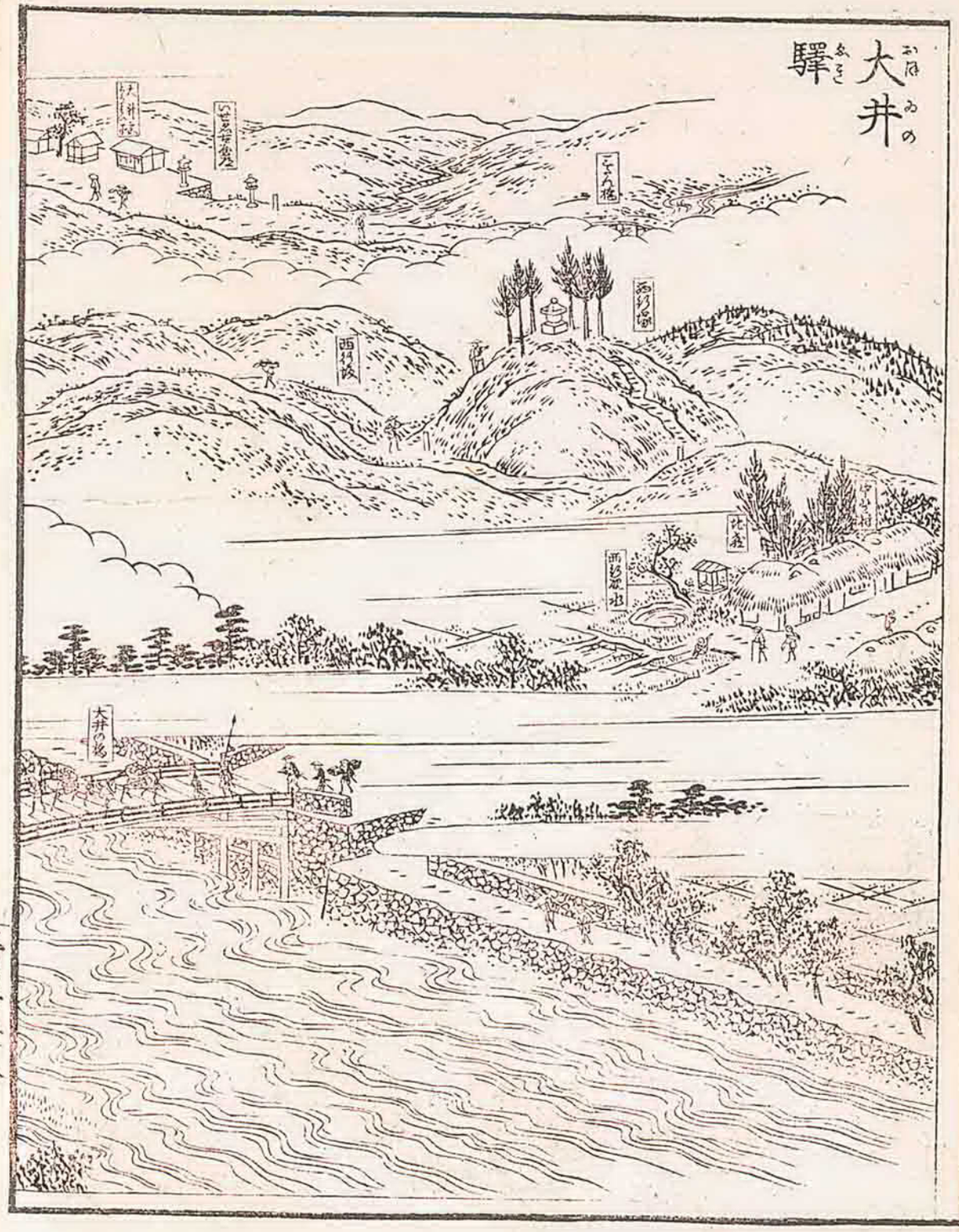
[illegible]糸宮又名[illegible]別[illegible]道 [illegible]村山中にあり
七本松 [illegible]
西行法師 [illegible]大井の宿中里西中村 西行硯池中世村[illegible]

大井（美濃）
中津川まで武里半 宿山中にて[illegible]の家三[illegible]町
許[illegible]山間小散在



本巻之五十七


遠くれ
とろろつ
そそる
本宿縄
の秋
春成
七本松
蕎金木
蕎金村
大井川


大井の駅
大井宿
こそろ橋
西行橋
西行品川
西行忍坂
比丘尼
大井の橋

我ものゝ嵐の声ふかく大井のよもに数をきく　あり

きれつる入おもの種の夢覚ゆあすもやとは宮とすん　日

式二首の哥ハ西行と記し　稲荷山長岡寺に記して大井の宿内

記　山　大井の宿の南東北村の中橋ふかい所ふかい西行法師

東海道の内ふかい三峯ふ住して行林房ふ房の右ふを

遺に又其附の井も

ふかい

山家

思ふてゝ見のかゝん本の年に何ふけあく我なをみん　西行

哀題

見ものゝ墓にをみける嘗此世の礼ハ行て妻とをゝすか　墓人をゝ

大井橋　大井の駅西の方入口ふあり中間ふ橋板ゝ

山川　急流ゝ

根津基平墓　大井の東石塔村ふあり甲斐武田信玄の家臣ゝ

富士退ゝ

坂中　大井の宿中津川の宿の間ゝ

延喜式ふ坂おの駅ゝ

千鳥林ふあり性質ゝ

八幡宮　祭礼多居末社二前

美濃　中津川

落合ゝ下ゝ七里又所宿内和對して巻狩ゝ年ふ所

ばゝ餅ゝ山間ふ教主ゝ右ふ苗本城ゝ

本名二五十九

中川神社　中津川の宿ふあり延喜式内

今白山と称ス

恵奈神社　中津川宿の巽ふあり延喜式内

与坂番所　与坂基ふあり尾州公ゝ

白木伊吹の物ふゝふ居ふ

落合五郎兼行霊社　落合の宿ふあり本名義仲の

兼行ふ

疫物語の里ゝ　落合の宿ふて元三十餘里美濃の境ふ

琵琶嶺ゝ山路ゝ　美濃路ゝ重毋駅栗田光典の考証ふ

交ゝゝふ記ゝ行ゝ恵奈郡ふ古道あゝて美濃ふ

小菌原伏屋ゝ入ゝ　妻三代寿孫ふ見ゝ天暦天徳の

頃ゝ奇ふを信濃ゝ弥ゝ落合ゝ動ゝ　雄月嶺ふて四十

七里大畧山中ゝて坂ゝ　ゝれゝ所ふ　みふ山家ゝ

少人の心ゝ　ゝて記ゝ　旅金のゝ　ゝふ　作方ゝ

ゝふまゝ　ゝ　又山川ゝゝ　林本のゝ　ゝ列ふ

ゝゝ人ゝ　ゝ　道のゝ

かゝる心をば三尊初真の行者雪深くしてゆきて稀なり
彼の生機道なれば領主より絶えず修理し給へば老人町人
なれども見えず

本曾路名所圖會卷之二終